The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 233. OCTOBER, 3RD. 1890.

EDITORIAL:—The Three different Literalist. The Christ. (1)

MISCELLANEOUS:—The Comments on the "The Art of testing naginata." The Development of home. The condition of home has influence upon one's literal thoughts. (2) "The thoughts of home on an autumn evening." The rare philanthropist. Miss Clara Barton. Humorous.

NOVEL:—The little Lord Fauntlroy. (Wakamatsu Shidzu.)

CRITICL NOTES:—"Nihon Hioron," "Sasa no ya go hiaku shu." "Riuhō Iboku." "Tsuisan Ichiwa." "Ongaku Zasshi." "Kodomo." "Bundan."

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百三十三號目次

●社說　三種の文學者○基督（上）

●雜錄　薙刀術を讀む（星野愼）○ホームの進化○文學思想の盛衰、ホームの影響○秋の夕ぐれ故鄕を思ふ（雲峯子）○磯の華草（田邊花圃）○慈善家クラヽ、バートン女史○きよめぬ庭

●小說　小公子（若松しづ子）

●批評　流芳遺墨、過費一話○現今理學の進步○さゝのや五百首○日本評論○音樂雜誌○こども○文壇

●寄書　桂貞子の君を悼む（佐々城豐壽）田邊次郎一君小傳（岡本賢輔）○兒守歌に和文の妙あり（まさを）

●交詢　女學の衰運○矯風家の言行○洋妾と支那妾との相場○探偵美人○スタイン翁死す○支那人の妻○功臣優待○新樂器○男女混淆○外人の祈禱○大同新聞

●宮廷錄事　皇太后陛下○皇后陛下の御慰問○仝陛下の恩賜○皇女の御歸京

●片々　女子學院附屬幼稚園○婦人矯風會○外人結婚の注意○敎員任命○信徒なるが故に免職○日本赤十字社○柳川婦人會○菓子商の大會○阿波縮○音樂博士の讒言○女學校の割烹科○谷間の姫百合

議員、官吏、有志者諸君に呈す

拜啓益々御清安奉賀候國家の爲め重職に就き日夜御黽勉乍陰邦民の爲に鳴謝致居事に候陳者近年女子教育頓かに進歩し二十三十にして初て女學校に入る人も多く有之の勢ひ喜ばしきことと存候然るに既に一家の妻となり特に多忙多用の貴人を內助せらるゝの令閨諸君は出でゝ學び給ふの暇まも固より少きの處ろ、世は息まず開化し婦人の地位著じるしく進歩致候に付きては、今後婦人同性の往來は彌よ自由にあり女性が外に出でゝ宴會交際に周旋せらるゝこと亦彌よ頻繁と可相成歟其際賢夫人にして萬一普通一般の學識に欠る如きこと有之時は談話應接の砌り面白からぬこと數多出來すべくと密かに掛念する者少からず候。弊社此等の不便に痛歎し、每月一回通信女學講義錄と云へるを出版し、學校に通はれぬ婦人は家に居て獨學する樣、當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歐百人一首講義、作文、算術、動植、理化學、萬國及日本の歷史、並に地理、等を一年にて滯りなく卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則を設け講義錄の文章は分り易き上に一々假名を附け、且つ繪を入れ、尙不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし、學校にて直ちに敎授を受るよりも一層便利多く致候、每月々謝卅二錢拂込の人には二百枚餘の講義錄を月々送ることに候目下既に第九卷を出版致たれども、今月新たに入學し其第一卷より順次に稽古するも宜しきことに候。

右の主旨何卒御賞玩被下弊社の精神御吹聽の程偏へに奉委賴候、凡て賢夫人家に居て內を修むるの暇まく〳〵、當今の女學悉皆講習の上に內助の德一きわにして所謂烈夫賢妻の共に國事に盡力するの美觀國中に充滿するに至らば邦家の幸福至大に存じ候敬白

右通信女學講義錄壹册三十二錢（全國無郵稅）每月十日出版、半年前金壹圓八拾錢。一年前金三圓五拾錢。女學雜誌と併せ購讀の人には壹割を減す。

東京市麹町區六番丁六番地
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百三十三號　明治二十三年十月四日發兌

社說

三種の文學者

文學は人が成す所ろの業なり、人にさま〴〵の種別あるを以て、文學にも亦たいろ〳〵の類あり。

吾人、世相を觀ずるに、人に三つの類あることを認たむ。若し夫れ、日本在來の分級によりて之を分たんには、士農工商の四つあることを知る、若し四五年前の世の有樣に隨がひて分たんには、官員と人民との二つあることを知る、左れど今ま吾人が茲に分類の目安と爲す所ろのものは、斯る轉變し易き暫らくの間の假りの差別にはあらず、大凡そ人ありて世に立ち社會に混じて業務を爲し初めたらん最始の時より、今后日移り月廻りて人類悉とく天の使の如くなり了ることあらん日迄は、昔しも后ちも今の東にも西にも、皆な必らずや存することあらんの差別これ也。吾人其の差別に三つの類あることを認む。

即はち人が其業を爲すの心得に、三種の覺悟ある也。第一は世に求めて益せんことを欲するものあり、第二は自ら慰さみて樂しまんことを欲するものあり、第三は世に敎へて之を改めんことを欲するもの也。第一の求むる所ろのものは、金、譽れ、權力あり、すでに世より之を求めんことを欲す、勢ひ先づ世の求むる所ろに相應して、世が與へんとするの筆法に及第し、以て其授くる所ろのものを頂戴せずんばある可らず、世もし此の如くあれと云はゞ、われ亦其の如くあらざる可らず、然らずんば到底其好意に浴して賜物を受領することあたわざれば也。第二の求むる所ろのものは、自ら慰さまんことにあり、自から慰さまんことを欲するものは、必らずしも世に媚ぶることなし、然れども亦た世より惡まるゝことを願はず、何んとなれば、世に惡まれて而して自ら樂しまんとの甚はだ難きがゆえ也、左れば自慰自樂を求むる所ろのものは、或る限り迄で己れを殺ろし、或る限り迄世にへつらひ、亦或る限り迄は氣儘を言ひ、たとへば瓢箪の水に浮ぶが如く、うなぎ、なまづ、のぬらつくが如く、ワンパク子僧が陀々を言ふが如く、世を棄て、亦世に棄られ、世を馬鹿にし、亦た世に馬鹿にされて暮らすことあるべし。第三の求むる所ろに至つては、社會を改良し、世人を敎化せんことを欲するにあり、かれすでに世を改めんことを欲す、固より世に容れらるゝことを希はず、たゞ希ふ

所ろは世を鬪打して己が理想中に容れんとを欲するにあり、亦かれは既に人を導びかんとを欲す、故に此の人々より賞めらるゝとは伴隨せる家來よりわほぎ立てらるゝが如く、何の嬉しきともあるなし、亦た此の人々の中に於て金をもうけんとは、赤子の手を紐りて其金を奪ふが如し、事至つて容易なるがゆへに慘酷にして爲すに忍びず、夫れ彼は現世を改ため之を敎化せんとを欲する也、ゆへに其求むる所ろのもの現世以外に超然たり、富貴權勢の之を暗ますとあたはざるは、猶ほ富岳が黑雲濛々の上に白く聳ゆるが如く、名聲褒貶の之を迷はすあたはざるは、宛がら兩岸の千紅万紫洪河の洋々として大海に流れ入るを防ぐと能はざるに似たり。世に賞めらるるみあらずして、世に惡まるゝみあり、世に歡迎せらるゝにあらで、世に冷遇せらるゝにあり。

人の業を成すに、右三種の覺悟あるとを知らば、文學者と云へる一個業躰の人種にも亦た同じきほどの差別あるとを知るべし。 第一の文學者は、筆によつて金をもうけんとを欲す、其やゝ甲羅を經たるは名譽を得んとを欲す、此類にもまさりて慾心の更に大ひなるは、筆によつて權勢を得んとを欲する也、此種の文學者が筆を下すや、先づ世間の好尙を察し、人氣を測り、氣合を見込み、恰かも能く痒き所ろに手屆き、口開けたる所ろに牡丹餅を投ずるが如くに工夫す、左れば一篇の文章出る每に喝采うしほの湧くが如く、ヤンヤと賞め立てられて落陽頗ぶる騷がし、此に至れば彼が大望成就して、筆工料ならば餘計に收入し、出版物ならば澤山に賣れ、多くの黃金白銀を得べし、腹のふくるゝと共に慢心自得して乍まち文學の大家を氣取り、身のまわりの樣子俄然一變して恐ろしき權幕とはなる也、斯くして名譽いよ〳〵高く、權力竹の子の如くに伸ぶ、彼が滿足思ふべきもの也。

第二の文學者は、人に天職あるとを思はず、此の嚴そかなる天地に生れ出でゝ、世事不容易の國の表に立ち、民塗炭にくるしみ、同胞死生流轉に出沒するを見るも、敢て自家世に存するとの偶然ならざるを思はず、たゞ鼻歌をうたひ、小躍りなし、瓢の底を傾むけて歡樂するを此上なきとと思ふの狀あり、ゆえに其文章をつゞるは、姬が慰さみに機を織るに似たり、たゞ色々に工夫してさま〴〵の模樣を織り出さんとするに過ぎず、一杯を汲ほし陶然醉ふて吟じ出したるの歌は彼がインスピレーシヨンの歌なり、滑稽にしやれ、地口俳諧の口調を以て甘まく文字を並べ立てたるとあらんには、是れ彼が

縷心刻骨の文章あり、少さかの事を癪にさへ、自分等の名譽を大辨護せんとて、隨筆叢書インサイクロペデアの中より百万の雜兵を驅りつどへ、惡口、冷笑、侮蔑、毒嘲の語氣を以て、迸とばしり出だせる大文章は、堂々たる彼れが議論文なり。

第三の文學者は、文學者を以て自任するものに非ず、たとへばデモスゼニースが話し家にあらざる如く、此の文學者は文章のつくり手にはあらざる也、たゞ文章を、假つて其の胸中鬱勃の思想を發露し、其思ひを文辭の上に載せて人の耳目より其心中に注入せんヿを欲するもの也、而して其思想は悉とく改革的の思想なり、小說となりては其の輕々淡々たる叙事の下に矯風改俗の精神蟠かまり存するヿを見るべし、論文とありては噴火山の火口噴々と天を焦し、大地震の地を震つて全世界を動かすが如し、たゞ此の天地を震動搖亂して其現狀を改ためんヿを欲する也。固より此改革派の文學者にも、穩和なるものと急激なるものとあるべし。春の如く之を温ためて自づから發達せしむるヿを旨とするものもあるべく、亦嚴冬の如く之を冷やして凛然威服せしむるヿを得意とするものもあるべし、然れども要するに世を導びかんヿを欲するにありて世に隨はんヿを欲するにあらず、世の爲に働らきて其公益の爲に身を捐てんヿを欲するの覺悟にあつて、自ら益しもしくは自から樂しまんヿを欲するの覺悟にはあらず。

文學者には明らかに三種の別あり、今の文學者たらんとするもの果して其の何れをか善しとする。第一に屬して成功すれば文章必らず喝釆せらるべし、隨つて黃金、名聲、權力を得べし、但だ世の波のうねるまゝに浮沈するが故に、其狂瀾をかへして、天下の大潮を后ろに退ぞくるの大功ある可らず、前の利を受るが故に、后の國益を爲すヿ能はず、必らずや、其一を擇び取らずんばある可らず。第二に屬して成功すれば、自家の慰みとなりて、己れ一身の樂しみは無上ならんとす、世みな歎けるとき獨り笑ひ、世みな困するとき獨り喜こぶヿを得べし、然れども其の人の友とするものは、月か、花か、虫か、文字は、名句調かにあり、たへて心あるの人間にてあらざるがゆへに、彼れ世に於て樂しむと云ふといへども、實は空山の奧、沙漠の眞中に於て獨り笑ふの樣に外ならず、自から樂しといふと云へども實は世を厭ひてたゞ放言するに過ぎず、夫れ世に求むれば世の奴隸とならさる可らず、世を改めんとすれば世の先生とならざる可らず、此種の文學者は世

の奴隷ともならず、亦其先生ともならず、たゞ獨居孤存せんとす、即はち世外の一偏僻人にして、木石に群する生氣なきの存在者となるべし。第三に屬して成功すといへども、文學者の名擧は固より望む可らず、凡そ世を改ためんとするの文章にして、もし直ちに博く世上より喝采せられんには、其文すでに改革的の英氣に減じたることを知る也、かれ世に逆らふ固より世より賞めらるべき筈なし、其文辭は兎に角、其文辭中の思想、其論說の精神に至つては、大に世に背く所あるべし、左れど一部少數の世人より同情を受ることは或は之あるべしと云へど、一汎世人に乍まち喝采せらるゝが如きは、夢にも之あるべきの事にあらず、然るに彼が文章にして若し今ま容易く大名擧を博すれば其文章はすでに世に同じきなり、安くんぞ世に先だつと言はん、カーライルも、ヲイツヲルスも、ミルトンも、初めは皆な世より逆待せられたり、何んとなれば其文章超然として世に優れ、遥かに當時の好尙の外に飛拔たればなり。

敢て今の文學者たらんとするものに問ふ、君等何種の類に入らんとを決心する乎。又吾人の愛する日本國に問ふ、汝が目今の文章界、は果して何種の文學を歡待しつゝある乎。

基督（上）

基督教社會目下の景勢は、狂瀾まさに打寄せんとするに先だち、一天暴風の兆、慘ましきものに似たり。今后の動靜果して何如に、磯邊の人は固より言ふに及ばず、山頂に立てる傍觀者も、易き心なし。

回顧すれば、明治十六年の頃にてありき、多年陰々の裏に鬱積したる我國基督教の勢力、勃然世上に立現はれ、爾來傳道の進步長大足にして、勢ほひ竹を破るが如く、亦大深の斷崖千仭を落下するの狀あり、四面楚歌の聲は、ホザナよホザナよと叫ぶ歡呼万歲の聲に代り、万づの景情一致して、皆齊しく福音の傳播を助長したり。斯る歡迎を蒙むらんとは、惣べての基督教徒が夢にも待構へざりし事にてありけり。弟子等一室に集まりて共に祈りしつれど、主、戶を叩きて入り來れば愕然として驚ろく、門徒相勵まして聖靈の降臨を祈る、聖靈降臨すれば、是れ狂へるなりと驚ろく。當日の驚歎、亦た其上の驚ろきに異ならず、明治十六年以后、僅か七八年にて、既に今日の盛運あらんとは、心あらん程の基督教徒が、假にも想ひ設けざりし所にてあるべし。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

盤錯に會せずんば利器を出すことなく、困難に際せずば英氣現はるゝことなし、基督教徒の熱心はつねに迫害ある地に光彩を發つもの也。迫害なくして四方之を歡待するの日に當つては、英將も時に眠ることあり、强卒も時に懶たることあり、況んや輕薄柔弱の人、基督教會の信用あるを利して、譯もなく入會し、以て品行方正の世評を博せんとするものすら出で來、教會は自づからに活氣を失ひ、活氣なきの末、漸次に腐敗することあるべし。蒸氣沸々たるの時、上より壓すること强ければ、氣力ます〳〵强よし、一朝蓋を開きて蒸氣を四方に開散すれば、氣力けむの如く、霞の如く、殆んど空々に歸せんとす。迫害なき時代の基督教徒は、宛がら壓力なき器の蒸氣の似とし。

議論の時代

敵、陣頭に近づくとき、帷幄の内に討論會を開くものもあるまじ、四面迫害の戰塲には、熱心燃ゆるが如く、われと己が肉を食はんとするほどの働き手も生ずるなり。左れど戰熄み劒藏まるの太平世界には、則はち格式の講釋も初まり、亦茶の湯の稽古も初まるべし。今の基督教會や、之に近づくものに非や。此に於てか議論の時代となれり。すでに議論の時代なるが故に、樣々の議論家いよ〳〵多く舶來するに至る也。昔し働らきの時代には働らき手として來るもの多かりき、左れど今日來るものは議論家として來る也。今や基督教社會の議論家續々踵を接して來る。

先づ獨逸國のスピンチル氏來る、氏が設立したる教會は、普及福音教會と稱し、廣告して、日本に來れる自由神學派の率先者なりと云へり。次に米國のナップ氏來る、氏が宣言せる所ろの教義は、ユニテリアン主義なりと云へり、ユニテリアンとは三位一躰を信ぜず、基督を人類なりと評釋し、總じて舊時代の神學に服せざる異論者の一群を云ふなり、其意見もとより區々にして一定せずと云へど、所云る神學自由派に屬するものゝ一たると明らかなり。極めて近く、ペリン氏の齎らしたる、宇宙神教(ユニヴエルサリズム)なるもの來る、此は殆んど前掲の二派と同じきものにして、只だ其起元を異にするにより名稱を違へるものなり、大要、死后の神罰、言ふが如く過酷ならざることを論じ、亦た基督の神性を無みし、アダム、イブの元罪説を否むもの也。

三つの新舶來物ありたるが爲のみならず、洋行歸朝の日本神學者は、多く其舊意見を動かして歸り來れり。奇跡、三位一躰、安息日等の問題に關して、以前と大に異なりたる意見を

家ごとにしたる知名の神學者もありければ、邦內の信仰を動かすこと、亦た尋常ならざりき。

加ふるに、三四年前來ひそかに地にもぐり居たる、プリモス、プレスレンと稱する一派、極端過激の神學說を發表し來り、熱心殆んど狂へる斗りの勇氣を以て、府內八面の諸敎會を動かすが故に、敎會內長夜の眠に熟睡したる人々も、愕然として驚ろく者如今頗ぶる多し。

種々の元因相合して、今の基督敎社會を議論の時代に推し移したり。或る牧師は之が爲に其信仰を根底より動かされんとするものあり、或る敎師は之が爲めに新たに神學を硏究せんとするものあり。驟雨の將に到らんとし、陣雷のまさに落んとするが如く、人々皆な安泰の念なきに似たり。

吾人は信ず、之れ基督敎會一進化の機なり。世上の万事議論によりて進步したること少しとせず、吾人必らずしも議論を無みするものにあらざる也。之によつて迷信快散し、頑固氷解するに至らば、大道の益少小にあらず。今は産みの苦しみの日あり、万艱一過して、玉兒を擧ぐるの曉、速かに到來せんことを信じ、且つ祈るもの也。然れども、此際實に危急存亡の秋にして、大進化の機伏するの瞬間時は、大亡滅頭を擡げて、折を窺ふの一刹那なるを斷知す、今は信徒が所存の臍を固むべきの日也。

一の覺悟

故に吾人は議論の時代を迷惑に思ふことなく、亦之を輕しむることなし、然れども毅然として猛立するの勇なきもの、輕々として議論流變の渦中に卷き込るゝことを最も悲しきことに思ふ。

凡そ議論は、從來信ずる所ろのものを動かさんとするより起る。ヨシ、動かさんとするは可也、然れども動かされ了するの時に至る迄は、斷乎として舊說を確信せずんばある可らず。苟くも懷疑者となつて万事を悉とく疑殺せんとするものは論ぜず、假りにも人情世事、唯だ信の上に立つことを知り、信是れ万行の基ひにして而して吾人は一日も勉務なかる可らざることを確信するに於ては、たとひ百の異端、千の難辨、眼前に雲霧の如くに閉塞し來るも、確かに動かされ了する迄は、其前說を棄つことある可らず。前說を棄つるの日は、后說を握るの日にして、其間一刻も懷疑の鬼に屈することある可らざる也。修身道德の途に於ては、日として此の覺悟を忘却す可らず。

閑門題

左れば吾人は、議論の囂々喧ましき間に立て、尚ほ一身を

處し、万行を規するの、信仰を確として握り居ることを得べきを知る。況んや、今の神學者の議論の如きは、殆んど基督敎中心切要の點に左したる痛痒なく、其論の一盛一衰は眞個クリスチアンの修身に、大したる影響なきことを思ふに於ては、今の堂々たる神學者が、其傳道の半日を殆んど此の閑問題の爲に消却するを見て、遺憾にたへず。

吾人は自から閑問題に關はることを欲せず、安くんぞ故らに切要帋面を割愛せんや。たゞ「好人物」「癖人物」を論じ去つて、將に「完人物」を理想せんとするに當り、勢ひ、目下溢々たる敎問題の一つに關係せずんばある可らず、吾人故なく神學上の議論に喙を容るゝものに非る也。

所云る閑問題の一つとは、基督の神性人性を疑ふの論是れ也。三つの自由派は之を人となさんとするが爲めに波瀾を捲き起し、一つのプレスレンは之を神子と崇むるとの一層過極なるによつて敎制を打破すると强し、而して滔々たる神學者、及び一般信徒は、將に其論定に忙がわしからんとす。吾人思へらく、如此く迂あると蓋し尠あしと。

皆人の實癡の種子や秋の月　　はせを

雜録

「薙刀術」を讀む

星野愼

明治女學校薙刀及柔術敎師、林學士星野氏より、前二號に渉れる「薙刀」の説を讀むの評一篇を寄せらる。如ㇾ左。

忝なし、同感同歎の志士出でぬ、靑山樂司てふ御方薙刀術の事を詳しく説かれたり、嬉しくて其主張する所を見るに單に女學生の身躰弱まり行くを嘆きて最良の運動法なりと言ふに過ぎず、予は疾に女學生の身躰も意志も共に弱く成り往くを痛嘆して當年早く此誌上に演べ又「女學生」雜誌一二號に之れを演べぬ、言ふ所運動の點は先生と異る所なけれど、肝心の武粹を輕く見られしぞ無念なる。先生は專ら運動法を立論の原基とするが故に動もすれば體操術に優らざる如き感を起す所多くて説弱し、稽古者の殺風景なしといひ、踊よりも優美(思ふにシトヤカといふ意ならん)なりと賛め、他人の見物を防ぐといひ、荒々しき流義出來りぬと嘆ずるなど、其細心却て此術を弱むる如し、殊に一定の形以外を講ずる事を否とさるゝに似たるは僻事なり、形は定義なり固より之に熟練する事大切なり、されど形成立たる後には應用し見る事も大

事なり、即ち試合にあらずして裝具せる敵と戰ひ入身に成らるゝ事を防ぎて唯打込む事是れ也、此應用なくば進退、眼勢、氣息、意志が活動刺戟物に因て發達する所の武の妙所は進歩上遲緩の不利あるべし、況して是を講ずるに少しも不似合の事あらざるをや。躰操は器械的の死物運動にして命なし、武術のこれに優る事は活物運動にして命あればなり、されば此命なくば何ぞ奇を好んで躰操を代る事を望むべき、平凡たる世人の眼は此命を知らざればこそ冷かに居らるゝなり、此命こそ先生が幽かに、泰然たる氣力を鼓舞し溫和優美の中自ら沈着たる神心を涵養せしむる傾向ありといはれたる者なれ、予は此躰育の事は單に其一班として見る事左の如くなるを知るべし、武道（薙刀術とするも宜し）を別て言はゞ

○武藝、（武器を使ふの技術を云ふ即ち武の入口なり）
　第一護身術、を得て氣安く心強し
　第二躰育法、成りて自在の運動より愉快に進て健也
　第三風采、奥床しく坐作進退沈重且敏捷となる
○武想、（變事又は危險の時も用意周到不覺の誤少く、能く武藝を用ゆる機會を知るの思想なり）
○武膽、（沈勇大度、外柔に內剛に、氣を臍下丹田に沈めよといふ者は此剛毅膽力を養成するの事を云）

予は此の如く考へ居るゆへに青山先生と薙刀術を熱心に唱道する精神は同じなれども、一小班たる躰育を主眼として叫ばず、素人の窺ひ知れざる武膽を以て女學生の弱膽を苅拂はんとし傍ら其身躰の羸弱を救はんとは勤むるなり、故に區々たる流義に至ては敢へて論ずるに遑あらず、唯敎授する者をして無文の武人思想たらしめず、敎誨を武想に置て目的を武膽とし徒らに武藝の粗暴を弄せざるとを望むなり、武人中に青山先生の如き思想を見るは實に感謝に堪へざる所、ア、我が提携の人を得たるかな。

因に曰、予は諸流皆長所あるを知る故偏頗的武人の所説を好ます、されど薙刀術の或派に於ては邪径に流れて美事に狂ひ躍り殆ど舞ひ踊りの如くに趣きて岐険なる武の觀相を失ふに至りしものあり、斯しては唯素人見せの派にするのみにて死生極るさいふ大事の覺悟消え沈重莊嚴中一氣呵成すさいふ鋒頭鈍く從て武膽發達に遲し、學ぶ者亦其流を擇むに心すべき所なり。

ホームの進化

香軒生

幼き時より住み馴れたる古郷とて山河草木、茅屋破窓、皆なつかし、一生の間昔時の事を思ひ出て、連感聯情止む時なし、此感情の起る毎に心骨に快く樂し、憐むべし蠻野遊牧の民、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼等は水草を分けて移住するが故に未だ曾つて一所定居の地なく、故郷と云はん所なし、されば故郷に關する感情の快味を知らず、沙漠荒原のアラビヤ人を試みに見よ、彼の樂しき聯感のあるを知らず、其世にあるや、天幕の内に宿るが如く、沙上の假屋に住するが如く、動く波間の捨小舟に乘るが如く暮す、憐むべし、斯る生涯を送る蠻野の民。

○幸福とホーム

已に故郷を知らず、ホームを知らず、安んぞ是より生ずる高潔の愛情、清美の幸福を知らんや、竈下一塊の冷石は無限の力を有する磁石にして金銀財寶を以て購ひ得べからざる寶玉(愛情幸福を云ふ)を吸引す、其動かざる事天にある物の變らざるが如し、是亦ホームを知る者に非ずば味ふ能はざる所とす、米國最初の植民の如きは其狀勢よりして居を定むるを得ざりき、今日米國の社會あるは只彼等ありしが故なりと云へども其居住の不定なりし時は大ひに故郷を愛し、ホームを慕ふの情發達せざりき、殊に國內戰時の頃は人民住居を定むる能はず、轉移限りあらざりき、されど社會漸く進むに從つて次第に人の住居定まれり。

○社會はホームより成る

人集つてホームとなり、ホーム集つて一社會となる、一棟の茅屋、一軒の藁屋も必らず一種の氣風を存す、是即ち社會の元素なり、故にホームにして皆清潔、高尙の勢力を現はすに至らば一國の富强期して望むべきなり、古聖が所謂家整つて而して國治るとは是これを云ふなり。

○ホームは有機物なり

一個人の集合せるもの未だ必らずしもホームならず、ホームとは人集つて有機体となるに至れるを云ふ、只夫れ有機物なるが故に建設する能はず、只自然に生長するのみ、夫れ有機躰は種々の元素よりなる、ホーム亦然るべきは理の當然なり、父母及び子孫、是をホームの元素となす、三者は是ホームをなす莖幹の如し、其根は深く上帝の意匠より生ず、其枝葉は繁茂生育して人類社會てふ大木となり、全地に蔓榮す、ホームは一人若くは二人にて組成し得べし、されどこれ凡庸の人には能はず、非常に發達せる人のみなし能ふべし、眞正のホームとは其組成する人の數を問はず、果して有機躰の實ありて精神と身躰を備へ、よく發達するや否やと云ふにあり。

○女子はホームを成す性を具備す

男子に比して女子は自然にホームを成し得るの天性ありと云

ふ人あり、或は然らん、女子の性よく愛情もて家を温め、懇情もて人を遇す、繁劇の務めに當る人すら尚餘暇を以て一家の内を快樂ならしめ、爽快ならしむ、されど之を以て女子のみホームを爲すものと云ふべからず、男子亦等しくホームを要す、人家庭の教育を藉らず、温かなるホームの内に發達せずんば生涯に失ふ事少なからず、豈ホームを要するに於て男女の別あらんや、男子外に働ひて供給し、女子内に務めて節用す、彼の勞力と智力は此の温和と愛情の如く必要なり、ホームの要素たるに於て兩者優劣なし、全くあるなし。

○第三の要素

男女相合つて父母となり、是に次で亦一の要素なかるべからず、或は子女にせよ、事業にせよ、若くは無形の思想にせよ、兩者の間に生出し、發育する所のもの即ち此要素なり、或人云へらく凡そ世界に於て二物相合ふ時は必らず其間に一物發生す、而して其發生する所のもの必らず始めの二者に優る、是進化の順序のみ、理の然るべき所とす、ヨシ形躰を備ゆる子女なくも、無形の思想父母の間に發生して子女の代りとなる事あり、人之を見て子女なしと云ふともホームは實際有機躰たるの名に背くなし、外形より如何に美はしきホームと見ゆるも若其愛情枯衰し、有機躰の實なくば一家忽ち貧困となり、暗慘不憫の狀態に陷らん、此時に於ては世の子女たるものホームの内に生出發育するに非ず、父母相和せざるが故に其子女は只一人の親を有するに等しきのみ、人類社會の孤立離散とは即ち是より始まる。

○ホームの發育

ホームまた他の有機躰の如く發育せざるべからず、何となれば内に一種の活氣を有し、外に形躰を示し純然たる有機躰なればなり、勿論其活氣は形躰より必要なり、されど兩者共に欠くべからず、若之を知らず、徒らに形躰の發達を計り、活氣の之と共に進歩せざるが如きは、危機の眼前に迫るものにして其滅亡久しからじ、内部の進歩せざるを厭はず猥りに外形を裝ひて、宏壯の家を建て、奇麗の器具を陳列し、千珍萬寶を蓄積するが如きは貧困窮乏を速くの業のみ、人類は萬代の嗣裔、長く絶えざるものとす、故に幸福のホームに住し、學術技藝の助けによつて益其進歩を計らざるべからず、之を爲す難きに非ず、勤勉、只之を要するのみ、不相當の勞力、賤しき貪慾、利己の如きは決して要せず、故に國民の内に於て最も貴重すべきものは拮据經營以て眞正のホームを作す平

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

民にありとす。

○理想のホーム

斯く記し來れば吾人が理想するホームは大厦高屋に非ず、金殿玉樓に非ず、愛情優然として充ち、和氣靄然として溢るゝ茅屋にあり、内を望めば父あり、母あり、小童小女と遊ぶ、東天漸く明け、風氣淸き時、朝に眺れば、一條の煙縷々として煙筒より立のぼり、家内自ら温かにして父は母を扶け、母は幼兒を愛育し、時來れば一家食卓を擁して團欒し、快語笑談の内に喫し終り、各別れて其務めをなす、母の終日の勤め亦父より少しとせず、或は食事を調へ、洗濯を爲し、亦家内の掃除より、日用衣服の裁縫にまで心を配り、常に其兒女に注意して怪我なからしめ、且敎育する事必要なり、眞正の愛情もて敎養する事は温たかなる日光に優りてよき感化を及ぼす、年光疾き事放てる矢に似り、一刻瞬時も油斷するなく勉めばホーム愈進まん、日暮るゝ比ほひ、父は勉めを果して家に歸る、幼童よろめく足をふみしめつゝ父を迎へんとて躍り出づ、父快然笑を含くんでこれを手に舉げ、母と兒女に遇ふて後、暫く夕飼の調はんほど、幼兒を抱ひて花園に逍遙す、長ぜる子の呼ぶに任せて父家に入り、亦團欒和合して樂しみの間に食を取る、夜に入つて相集り、相親しむ樣うるはし、各滿足に、活潑に、且幸福なる色をあらはす、子は父よりよき發達を爲し、女は母に優りて敎育を受け、兒女其靈肉共によき發達をなす、其親密の關係と、其相依るの愛情とは決して何人も妨ぐる能はじ、是豈眞に美觀ならずや、ホーム斯の如くならば其進歩望むべくして、其名に叶ふたるものと云ふべし、是をこれ理想のホームとは云ふなり。

文學思想の盛衰、ホームの影響、(中)

雲峯生

閑雅靜肅の境

文學者に最も必要なるは閑雅靜肅の境あり、キツボン嘗て云はく靜閑の居にあり、書を讀むに如くの快樂なし、余は印度の財貨にも倘此快樂をば換へじと、眞に文學を好む者に非ずんば文學者たる能はず、名譽の情、財貨の慾、人を誘ふて偶文學の事に當らしむるも到底永續すべからず、閑邃の地に居を卜し、書齋にはプライニー、マヅシエリー、マレートリ、モントフアウコン、ガフ其他古來大家名人の著作を堆積し、讀書勉學に日を費し、都會の繁雜、人界の黄塵は僅かに窓外

遥々の間に眺るのみ、文學者の居住宜しく斯の如くなるべし、若し夫れ眞の文學者たらば文學の事に心を用ゆるを以て無限の快樂を感じ、無上の幸福を知るが故に汚慾濁惰に誘るゝ事なく、塵界俗境を慕ふ事なし、愛する所は書物、只是のみ、著作、只是のみ、アウラス、ゼリアス云へる事あり。

　讀書と著作を爲す能はずば死すとも可なり

と、蓋し之を最も快樂に、最も幸福なりと思ふが故に或は老衰し、或は疾病に罹り、遂に讀書と著作を爲すを得ざるに至らば既に世に望む所なしと云ふにあり、イーリアン曰く若余が官途に就き、朝廷に奉仕せば莫大の富貴と名譽を得しならん、されど余は此富貴と名譽に優りて勉學を好む、世の心賤しき輩、利を是貪り、慾に是溺るゝの徒、余を目して或は誹讒せん、されど余は之を意とせず、蓋し余は動物の天性氣質を觀察研究し、之が進化の歴史を著はすを最上の樂しみとなせばなり、豈敢て人言を意とせんやと、世の文學に志さすもの當にイーリアンが熱心を學ぶべし。

　止る所を知らず

眞に心より好むが故に名望一世に高く、光譽四海に溢るゝも之に安んずる事なし、プライニー一度羅馬史を著はし、光榮燦然、海の内外に赫々たり、此に於て更に企るなく安樂平易に世を送らんとせばもとより彼の心に任すべし、然るに彼自ら止む能はず、著作と、勉學を絶つ事なかりき、ヒユーム亦斯の如く然り、彼が哲學の書を著はすや實に利を得んとするに非ず、亦名を博せんとにもあらざりき、彼已に名譽と財貨は得て足らざる事なかりしなり、是彼等の心よく休止する能はざるに出るものなり。

　愛する人を著作に入る

家内靜かなる時心を文學に傾け、意を著作に注ひで茫然氣旒しき時、突然間を隔て、妻君愛子等の語聲を聞く時は忽ち己れに歸り、世に係累する身なるを悟る、此時先きの文氣意勢は一度頓挫す、更らに勇氣を鼓して筆を取るに於て先きの思想は變じて其愛する妻君子女等を思ひ、之を著作中に書く事あり、モルレットなる人あり、或日一冊子を其妻君に示す、妻君手にして之を見れば「妻君に献ず」とあり、驚ひて之を讀む、思はざりき、妻君の高德を稱讃して一冊子を著さんとは、妻君以爲らく、著者無からん後、一は他日子女が此書を讀て父に謝し、一は以て之に依て學ぶ所あらんと、之を藏し置しとぞ亦チツカーと云る人あり、政治及び經濟に關する書を書けり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其妻君の家庭に於ける美德を稱揚せるの辭、赫々冊子に滿つ、讀者を感ぜしむる事多し、是亦ホームの影響の一例にして輕々看過すべきに非ず。

兩親の感化

親しき友に遇ふ每にホレース語つて曰く余が今日ある實に父の敎育によると、其父は稅吏にして尊しといふに非ざりしが夙に子を敎ゆるの道を悟り、田舍に住み、田夫に伍し、野人と伴ふは智を硏くの所以に非ずと知り、幼き時ホレースを移して都會の地に遊び、多くの師を擇び、就て學ばしめけり、グロシアス亦常に父の敎育のよかりしを謝せり。ヴ井トゥルーヴ井アス祈禱を捧ぐる每に其双親が彼に文學、哲學等の思想を注入せしを謝せざるといふ事なし。プルユタークの父は批評の大家にして亦德行ある人なりき、彼れの兄亦名ある著作を爲せり。ギッボン嘗て文集(Essay on Literature)を著はして父に獻ぜり、後彼が一生涯の著作大いにこの著作に關係を有す、而して其文集、全く父の敎育によつて成れるものなり。ポープ亦父の感化を謝し、詩に吟せし事屢あり。ブーフオン一日父の才識を稱贊し、之を記臆に止めんとて文章を草せり、父竊に之を見て大ひに驚きしとぞ、後革命の事起るや、彼之に加はり、遂に捕はれて刑場に出でたり、其斷頭機上に立つや、勇氣奮然少しも恐るゝ色なかりき、刀光一閃將に首を斷たれんとする時、徐に口を開いて云へり、曰く余はブーフオーンが子なりと、蓋し其敎育によつて勇氣を養ひ得たり、寧んぞ死を恐れんやとの意なるべし。父母の感化、斯の如く夬れ甚だし、人生れながらにしてもとより適任の天職あらん、されど人幼なふしては他より敎育せられ、長じては自ら養はずんば遂に天性を發達するを得じ、人の父母たる者鑑みる所ありて可也。

秋の夕故郷を想ふ

雲峯子

山谷僻陬の地も住む人には、花の都にまさりて慕はるゝものなり、空漠人跡なく、寂歷人家なきに至るも、ふる郷とし聞かば坐ろになつかしく、ありし昔の忍ばるゝめり、ましてや双親まだ世に在はし、兄弟もあり、其幼子とへ生ひたちて東路の都の空をのぞみては、叔母上いかにと云ひかはすと、文のたよりに聞く人なや、いかにふるさと戀しかるらん。時に親しき友と机を並し、袖を絞るも理りありかし、こは是余が友なる人の事なり、常に曰く故郷を思ふ心止むなし、願くは英語讃美歌(ゴスペル、ロムと云へるもの)百九十二番の譜によりて一曲を作れと、余は諾せり、然れども其句調七五と大ひに異り、ものするに難し、蓋し我國の詩歌自ら七五の句調に適するもの多ければなり、例の如く意に充たざれども亦揭ぐ、

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

一

ゆふかぜたち、　ひかげ消えぬ、
空いとさびしく、　くれ渡りぬ、
窓の戸、　ひらきて、
獨りながむれば、　おもひうかぶ。

二

くもゐにおく、　はつかりがね、
しら露にすだく、　草葉のむし、
くもまの　三日月、
きく聲見るかげ、　こゝろぼそし。

三

ふるさとこそ、　なつかしけれ、
たらちねの親を、　おもひいでつ、
こゝろは、　しづみて、
まなびの道をば、　ふみぞたゆたふ。

四

さむきゆうべ、　かなしきあさ、
異鄕の空に、　學ぶ身は、
たのまん、　ひとなく、
ふるさとのみこそ、　おもはれけれ。

五

くちさがなき、　世のひと〴〵、
こゝろのかはるは、　あすか河、
さだめぬ、　ふちせよ、
いとも似たりけり、　あゝはかなし。

六

世はうつるも、　かはらぬこそ、
まことのあいなれ、　あゝたらちねよ、
たのしく、　あふ日を、
まちつゝ望みつ、　我學ばん。

七

めぐみのつゆ、　ゆたかなれば、
おさなきみどり子、　おいたつすゑ、
みかみの、　さかえを、
世にあらはすらん、　いとたのもし。

磯のふで草（一）

田邊花圃女史

しばし見ざりしまに木立しげり合て庭をくらくいとゞあれまさりたる心地はすれど松の片枝かれしに無常をさとりしいにしへ人にくらぶればかく心地すが〱しくなりてたらちねの親と共にありし昔ども語りかはすそうれしきいてや其のこと〱を忘ざらん爲に三ツ二ツかいつけておかまし大磯へ出立しは七月の廿六日なりき父君もおのれを送て二日斗とゝまりて歸り玉ひぬ二日三日たちてふとものいひしはいとやせたる

人なりいかなる御病にやとまひしにいなもはや望なしとて二度はものもいはず例の心くせとてうちもおかれずもて行し菓子紙につゝみて其人に分けあたへありさまをみればげにたのみすくなくものうけなりこの日をはじめて夜々涼しきをはしまによりゐてさま〲の事どもかたりかはし聖書などおのれのよむ折はいつもうれしとて聞ゐたり又ある人扇もてきて何にまれかきてよといふはづかしけれとゆるすべくもあらねば

おもふどちののぼる山路にはからずも得たるうれしき撫子の花

こはけさわたで山にてともに花など摘みかはしゝ人なればなり又松林館にて

千とせまで榮へやすらんとふ人をまつの林にたてし此宿

其外かきしもありたれど忘れつこの旅店にてこよなくうれしかりしはかの病む人とあるくすしの君と濱邊にて月を見しなりけり夕すぐる頃より磯におり立ちて石などひろふほどにいつしか四斗樽てふものゝ大きさなる月出たりかぞふればこの夜はもち月なりとぞやゝ高うなるまゝに形は小さく成ゆけども光いとゞ加はりてよせくる波にかゞやくさまめでたしともめでたし心すみにすみて我身ありともおもえず人なき界に入たる心地して砂の上につゐ居ながむれば岩にくだくる波の音のみおどろ〱しう聞ゆ東の方に江の島幽に見えて漁ざる舩の火かげものすごくそこはかとなくかなしき夜のさまなり

たゞひとり月を見る哉わたつ海の千尋の底を思ひやりつゝ

げにしらぬさかひのもくずと成玉ひけん兄君の事花につけ雪につけおもひ出ぬ折はなしなれし宿の女の人々も兄をもたるが多かり兄妹ともにかたりたはむるゝさまを見ればいかにうれしからんとうら山しうて涙くまるまして都の空にのこる月かげ例のはしゐしてわが上兄君のうへかたりたまはでやはあるべきわが出立し朝も母君のかへらばともに熱海へなど待わたりしものを何方へも一人は與なかるべしとのたまひぬ兄君この世をさり玉ひしは五年前なれどその上のみおもへば昨日今日の心地して月日の立しは忘るゝものありけり人々の見るめもあるにさのみはとて立よればゆくりなくよせくる涙に袖をぬらしそふるも悲しかりき一日朝とくより心おかぬとち十五六人して千疊敷てふ山へのぼりたり道なき笹原をふみわけて行にあしつかれはてゝあゆみならはねばしば〱たゆたふを男の君達にいざなはれてからく頂にのぼりぬ實にひろやかにて一本の木なければ東西南北もれず見えてかのパノラマてふものに似たり海も山もこゝにて見ば手にとる如くにしてそ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

こにあるよりも趣ふかし遠くのぞめば太平洋にはしる舟も見べしなど人々たはふれつゝわりであとひらきてあたりの花など折なでしこ萩女郎花など敷たらんやうに咲亂たり折るもをし折らぬもはたをし人めなき山路の奥のあき草の花いかにせましなどいひてもいつしか手にあまるまでになりぬ。

（以下次號）

稀世の慈善家、クラ、バートン女史（上）

碓氷山人記す

女子の長ずる所は其感情深きとなん、只夫れ感情深きが故に不幸に遇へる人、災害に苦しむ者を見て惻隱の心を起す事切なり、是女子が慈善の事業を爲すに適する所以なり、米國に一女丈夫あり、名をクラ、バートンといふ、身を慈善の大業に投じ、命を救濟の要路に委す、實に是一世の美觀、人輕忽に看過する勿れ。

○孃が初期の事業

クラ、バートン孃の名聲は世界各國の軍人社會に赫然たり、孃はマサチユーセッツ州の貧家に生れぬ、孃の生涯記は只に只愛國愛民の事業のみ、孃嘗てニウジヨルシー州にあり、公立學校の制を布くに力を盡せり、後亦ボルデンタウンに公立學校を起しぬ、始め破屋僅かに雨露を蔽ふに過ぎざる所を借り、六名の生徒を集めて開校せり、未だ一年ならずして、此に學ぶ者六百人、赤瓦を以て堂々空に聳ゆるの校舍を建てり、其進歩の著しき事驚くばかりありき。

○身躰をワシントン府に養ふ

校務を負ひ、拮据する事此に年あり、漸く身躰の衰弱を招く、依て病をワシントン府に養ふ、千八百五十四年判事メーソンなる人孃の人となりを知り、擧げて秘書官に採用す、孃よく其任を盡す、是同府に於て女子が秘書官となれる始めとす、されば官吏名簿に孃の名あるを見て人々驚けり。

○南北戰爭の時期

南北戰爭の起るに當つてや報給を得るなし、亦他の委囑を蒙るなく、一片慈善の丹心を以て戰場に到り、鮮血淋漓深手によはる武士を舟に救ふてポトマック河を溯り、或は汚穢に滿ち、泥土に倒れ、三寸氣息僅かに殘るの戰士を原頭に助けて病院に導びきぬ、晝夜休息するなく心切深愛を以て看護に力を致せり、ワグナー城の圍解けたる時モリス島に在り、戰士の介抱に勤む、暗雨にうたれ瘴霧に晒され、遂に健康を害あひしかば身を養はん爲め亦此處を退くに至れり、孃が軍人の病める者及び傷ける人の間に在つてよく慈善博愛の事業を爲せし事は苟も此時戰に臨みしもの〻固く肝銘する所なり、千八百六十四年に當り、孃は大將バツトラーの下に在て某病院に非常の働きを爲せり、翌年アンドルソンヴヰルに至り、

義に死し、正に倒れたる人の空しく枯草の下に寒露と消え果てんを惜み、兵士の墳墓を捜索せり、久しからずして大將グラント、孃に命を傳へ、北軍の戰死者が骨を埋めし所を穿鑿せしめけり、熱心誠意の到る所なりけん、非常に巧みに且密に捜索を爲せり、（以下次號）

きよめぬ庭

其二十六

侍の御二足

洒落齋主人

言語と云ふものは、いとたふときものなり。此によりて心に思ふことを人にしらしめ、もてことをとゝのふ。又言語は國の手形と云ひ、言語によりて人の生れし國を知るの便とし、言語によりて其人の教育の度を知り、何れの階級に居る人なるやを知り、或は其云ふ言士どもの、眞なりや僞なりやをさえ、聽き判けることかたからず。昔者名も高き町奉行に、大岡越前守と云へる人あり、此人訴を定むるとき、必ず眼を閉ぢて人の面を見ず、ひたすら言語をのみ聽きて其ことの眞事僞事、あるは善惡を判ち知りしとなん。此は其面を見ば、にくさげなる面もちしたる男子の云ふことは、僞言とのみ聞え、いとなよやかなる顏ばせせる女子の云ふところは、例之そのことの僞言なるにはにもやらで、いとあわれ氣に聞ふること常なるをもてなりと。言語と云ふものそれほどの用を爲すものなれば、猥りに用ゐられんには、かならず其害ある可きこと理なり。

文字と云ふは、言語を有形にあらはすものなり、言語あらざりし昔なに文字と云ふもののある可き。されば人の己が思ふことゞ〳〵、他の人に知らせんには、文字によるに如くものなし。元より文字と言語との間に、なほ容子或は顏色など云ひて、思ふことを外にあらはす方法あれど、こゝには略しぬ。されば人と生れしもの、かならず文字と云ふもの習ふ可し、此なくば吾人のこゝろのさぞ淋しからむ。

文字を綴りしもの、そを文章と云ふ。文と云ふことも亦た、いと緊要のことゞもにて、たとえ文字を知るも、文かくすべ習はざれば、なに思ふほどのこと、人に知らせ、或はたゞ獨身なりとも、心を樂ましむることを得可き。春のあけぼのに遠山にたなびく霞を見、夏の木立のふきおろす風になびくさま。秋の夕名もなき草の葉末まで、置ける露の球を欺むくばかりなるに、月の冴たる、冬の朝とあり、去りぬる夕知らざ

る間に降りつもりたる雪の、樹々の梢埋みたる間より、朝づく日のさしたるさまなど見るも、文つゞり、歌よむすべ知らざる人は、此のけしきをうつして、樂しむことを得ず、いかほどかくやしう思ふらし。此にもまして殘りをしきは、己が事とする職務の上に起りたる何くれにつき、人と理非を爭ひ、或は人の爲、國の爲に事を論つらふをり、口にも之を云ふ能はず、筆にも之をかく能はざりしならんには、いかゞある可き。又た己が發見たること、實驗したることどもを、廣く世の人々に示して、公の益をなさんとするも、文かくすべ知らざらんには、いかほどか便り惡しかりなん。

文と云ふもの、かほどの用あるものから、之を入るほどに用ゐんは、實に文の道と理とを知りたる人のわざなる可けれど、世には文を弄ぶ人數多あり、やくなきことに筆を動かし、人の爲にも、己の爲にもならぬこと、かきつらぬる者あり、ことに劣れるは、事記さんをり、いたく、入用ならぬ文字のみ數多くならぶるぞ役なきわざなる。されば明治の政府も、こゝに見るところありてか、明治五年八月の五日なりき、史志の擡頭平出闕字等の書式を廢する旨を出して、冗文を省きしは、みな世を文明に進めんとするの、下心よりある可し。

東の京の、未だ荏土と云ひし頃、花は櫻樹、人は武士とて、侍の威勢いたく盛なりける頃、淺草のほとりに、みだりに人に噛つく、犬なんありける。或る朝のことなりけり、一人の侍の、此のほとり過ぎけるほどに、彼の犬出來りて、侍の足になん噛みつき、血どもいたく出ければ、侍大きに怒りて、かゝることをなしつる犬は、畜生のことゝて詮方なけれど、此の犬あることを知りつゝ、すておきになす町の名主どもこそふとゞきなれ、そのまゝにはさしおきがたし、とて云ひのゝしりければ、名主ども出來りて、ふるえ〲詫言なし、何卒畜生のことなれば、平に御用捨下しおかれたし、と地の面に己が額すりつけつゝ詫ける。されど侍すこしもきかず、畜生はよりどころなけれど、そを氣を付けざる、爾等こそ奇怪なり、とてなか〲きかず。町内の年寄、伍人組など、みな〲出でゝ詫ければ、侍少しく、心やわらぎ、然らば此度はゆるしつかはさんほどに、詫手形かく可し、と云ふ。町中大きによろこび、物よくかく者つれ來りて、詫書をなんかくに

一　侍の御御足を犬くらひ

とかき、かゝる文體にてよろしきや、と云ふに、名主ども之を見て、さればなり、われほどに怒られたるを、詫書にて勘辨せられんと云ふに、その文體にては、とても聞入れられまじ、且つ御御足とかきては、足三本ある如くきこえ、かたわとなる、總じて足は二本よりおきものなれば、二本のやうかく可し。且つ犬くらゐとはあまりにそまつのことばなれば、又々腹を立らるゝやも知らず、されば先づ

一　侍の御二足を犬賞玩仕る

と、かき始む可しとなん敎へける。

小説

小公子

第三回（下）

若松しづ子

まだ〳〵色々なことをし升は。第一かあさんに色々奇麗な物買つて上升。お針ざしだの、扇だの、金むくの腕貫や指環だの、大字引だの、それから馬車だの買つて上升。自分の馬車が有れば乗合が來るの侍てゐなくつても好ですもの。それから桃色の絹の着物が好ならば買つて上るけれど黑のが一番好なんです。それだから大きな店へつれて行つて、色々な物を見てかあさんの一番好なものなんでもおとんなさいつて云升。それからヂック子………

ヂックとは誰のとです？

と、ハ氏が問ひ升た。

ヂックといふのは子、靴磨きで、そうして大變好い靴磨きなんです。いつでも下町の角に立つてゐ升よ。そうして僕はモウ幾年か前から知つてたんです。先に子、僕がまだ少さかつた時、僕がかあさんと一處に外あるいてゐてよ、かあさんが僕にポン〳〵飛ぶ奇麗な鞠を買て下すつて子、僕が持つて歩るいてたら、馬車だの馬だのゐる通りの眞中へ飛んでつちまつたでせう、ダモンダから僕が大變失望して泣てたんです……僕、まだ少いさかつたもんですから子、まだ女の子の着る着物なんか着てたんですもの。其時に、ヂックが人の靴を磨いて居升たつけが「イヤアー」と云いながら、馬の歩てる中へ駈け込んで其鞠を取つて來て子、そうして自分の着物で拭いて「ソレ坊ちやん何んともないよ」つて僕に呉れたんです。だもんだからかあさんが大變感心して、僕も感心して、それからつていふものは僕たちが下町へ行くたんびにヂックにものをいふんです。ヂックが「イヤ

アー、」っていふから、僕も「イヤアー、」っていって、それから少し話しをして、チックが商買がどふだっていふんですが、近頃は不景氣だっていひ升たよ。

と若侯は面白い計畫を熱心になって述立て升た。

左樣ならばあなたは其チックとやらに何かして遣り度と仰しやるのです?。

と頤を撫でながら、片頬に笑を含みながら、ハー氏が問升た、

エー、僕は金でジェークの方を附けて仕舞ひ升。

ハ、ア、其ジェークとは又誰のとです?。

ジェークっていふのはね、チックの商買中間なんてす。そうしてどふも大變わるい中間なんてす。チックがそういふんです、チットモ正直でなくって、あゝいふ人がゐると商買の爲にわるいって。よく人を欺かしては、チックを怒らせるんです。あなただって一生懸命に靴を磨いてゐて、始終キチヤウメンにしてゐて、あなたの中間がチットダッテキチヤウメンでなくってズルイ事斗りすりやあゝおこるでせう。チックは人に好かれるんで、ジェークは嫌われるんです。ダカラ二度とジェークの處へは來ないんです。デスカラ僕がお金が有れば、お金を遣ってジェークの方をつけて、チックには眼だつ看板を買って遣り度んです、チックが看板があれば大變都合が好んだって云升もの、それから新しい著物と新しい掃を買って遣って、とりつかせて遣り度んです、チックが何んでも始めのとりつきが出來さへすれば好っていってるんです。

と聞覺へたチックの鄙語を其まゝ堂々と雜へての若侯の話し振りは、誠におどけなしとも可愛らしとも中樣のないほどでした。其心の中には自分の老成な話し合手が、矢張自分と同じ樣に其話しに身を入れるだろうといふとに、一點の疑をも入れない樣でした。ハー氏は實際、其話しに身を入れて居ったとは居り升たが、どちらかといへば、チックや林檎賣のとよりも、友人を思ふ情の濃やかな此若侯が、己を忘れて、細々と人の爲に謀るとに、注意して居ったのでした。やがて、

あなたは何が……………金持になったらあなたは御自分の物に買度ものは有ませんか?、

と尋ね升た。フォントルロイ殿は早速に、

それは澤山有升、デスがそれよりメレの妹にお金を遣り升。ダッテ子供が十二人有って亭主が仕事がないんですもの。いつでもこゝへ來ては泣んてす。そうしてかあさんが

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

籠の中へ入れてなんか遣るとまた泣いてどふも奥さま、お禮は申切れません」つていふんです。それからホップスおぢさんに金の時計と鎖とミヤレヤム製の煙管を置土產に上度と思ふんです。それから、こんどは僕が…度ものが有るんです。

と云ふのを聞て、さてはと八氏が、

それはまたどふいふとです。

僕は子、共和黨の時の樣に行列がして見度んです。僕の友だちみんなと僕の制服を拵らへて、そうして行列をして調練するんです。僕が金持ならば、こういふとを一つ遣つて見度んです。

セドリツクがます〳〵イキセキと話をしてゐる所へ戶が開いて、エロル夫人が座敷へ這入り升た。

據ないとでひどく手間どりまして、誠に失禮いたしました只今大層困窮をして居る女が逢度と申して參つたので、と氏に會釋して申しました。

ハ、左樣で御座り升たか、イヤ只今御子息がさま〴〵御朋友のとや、金滿家と爲つた上は朋友の爲にこふ〳〵して遣ろうなどゝ、お話し最中の所でした。

矢張りセデーが友だちと申人で御座り升が、只今盡處で夫の病氣彼是で、ひどく困難いたす樣に申升て。

此時セドリツクは彼の大倚子の上から滑り下り、

僕、ひとつ行つて、逢つて來ませう。そうしてあの人の病氣を尋ねて遣りませう。病氣でないときは、いくら好人だか。いつか僕に木の刀を拵へて吳れましたよ。大變な才子です。

いひながら、座敷を駈出し升た。八氏は此時少し座を正して何かエロル夫人に改めて云出る樣子でした。

批評

○流芳遺墨、追賛一話

勝海舟氏の編集及び追賛に成る。遺墨は、近世俊傑の芳痕をとゞめ、書あり、論あり、詩あり、狂歌ありて、坐ろに人豪の余情を掬ましむ、趣むき限りなし。追賛は、居士獨得の麗秀なる文字もて、珍らしき事、意外なる事を數多淡叙したり。憾むらくは、居士が鋭穿の批評眼なもて更に細かく古人の長所短所を摘露せざるとを、然れども此は賛話として溫和しき持なしに了れるものと見、滿足せざるを得ず。

德川齊昭、烈公の贊に、

其尊王の實の如きは其西山公の薫陶終始如レ一皆な其範圍中に出しと言ざるべけむ哉。我德川氏の一門世を終るまで朝家に反戾するの跡を不レ顧、是畢竟其の遺訓さいへども西山公の遺意冥々中沒せざるものありと云ふべき哉。

居士が言の葉ふるを以て特殊の味わひあり。井伊直弼侯の節に、家定將軍篤厚沈默内思あれども外に發せず、左れど親藩大藩が繼統の建言、忠愛赤心に出でず殆

んご强訴に類するを憤ふり斷然拒して容れず、平岡丹波に命じて直弼に委囑する所ありさ記して、且つ云く、

直弼命を奉じ決死其衝に當る維正に米使假條約の調印を迫り内紛外援一時に輻湊するの時なり安政五年紀伊宰相を迎へて養君さ定む是れ家定將軍の遺命に依るなり然れども事秘中の秘他人の得て窺ひ知る能はざる所なるを以て親藩一同大に平ならず已に内破の形勢を現出するに到りし也嗚呼當時大老の苦慮誰か能く明察せむ識に痛歎するに不堪也

これ開國始末にも劣らざる、直弼が爲めの大辨護さ云ふべし。又西郷隆盛を以て征韓論の張本さする俗評を斥ぞけ、明治八年十月、其の篠原に送りたる扇面の詩を掲げて云く、

江樓迎月滿雲霞。時送香風聞玉笙。回首海天在○沸。疎櫻疎影有餘清。

如此き類、居士が發する所ろさして初めて價ひあり、味はひあるを覺ゆ。二册共裝洗麗、純然風流の雅也、居士が作る所さして何にさふく異様に感ず、左れど此は陳羽織の美にして、素袍直衣の錦にはあらずかし。

物理學現今の進歩、第二卷

理學士木村駿吉氏著はす所ろにして、エーテル說、及び光さは電磁氣的の現象なる說、の二つを載す。文章の稍や解し難きは、深遠なる理學說なるにもよれど、亦た文辭を擇ぶに無頓着なるが故ならずんばあらず。然れども、近く一二年間に至る迄の最近發明說を掲げ、エーテルに關するフレネル、タムソン、ストループの說。又た光に關するヘルツ等の實驗說を、斯く容易に且つ普通に知らしむるを得るは、眞に著者の賜物さ云ふべし。

○日本評論

「日本評論」の歐洲文學論、素より凡庸にあらず、其の一褒一貶悉く現時の日本文學界を痛論するにありき。左れど、そは彼を打ちて此を響かしむるに過ぎず、正面此れを堅打して眞向より今の俗々文士を痛罵痛評し、而してその苦き批判、惡々しき惡口の下に、いさ清らかなる愛深き情けを混ずるは、其第十四號に掲げたる「實際さ理想」さ題する一篇にありさす。第一節、近來佛經講究の流行するを評して、亦是れ飛鳥川の淵瀨變化するが如く、衣服のハヤリ遷易するに異ならずさし、其講究者に向つて大ひなる覺悟を要求する一段の如きは、特に秀ひでたるの施言なりさす。第二節、今の文學界、施洗者ヨハ子の起り立たんとを熱禱するの所ろ、筆々躍立して、讀むもの思はず肉動き神躍えんさす、云はく、

威風堂々、相貌凜々、動靜擧止儼然さして其行狀電光の如くに、四邊を拂ひ、其言語霹靂の如くに人の心膽を拉ぎ、王公も其前に出ては威を失ひ貴胄も之に遭へば勇武を施こすに由なし、無人の曠野に在りて一さたび義の聲を發ちて道を宣れば、遠近響の如く之に應じ、ユダヤもエルサレムも擧りて其許に雲集し、前日の非を痛み往昔の過まちを悔ゐ、謹んで其道を奉ずるもの引きも斷らず。

さ

文學界に斯るヨハ子を要するとの如く、政治界にも、教育界にも亦同じく要す、之に應ずるもの果して誰ぞ。吾人は、日本評論及び其同主義の人々に向つて待ち望むと、頗ぶる深し。極めて切なり。

○音樂雜誌

四竈訥治氏が、發刊の主旨に據れば、日下音樂の道全國に洽ねからんさするの時、弊を矯め害を防ぎ正を助け邪を戒しめ以て正格優美なる音樂の發達を翼けんさするにあるよし。立派なる目的さこそ言ふべけれ、第一號には大したる音樂論を見ず、左れど追々に掲載せらるゝとさ思はる、欄の分ち方、周れく且つ行屆けり。

○こども

其の第七號を特更に寄送し、評せよさあるは、恐らく改良したりさの廣告に由れるなるべし。編輯何如にも能く氣付き、子供の讀むものには至極適當するやう思はる、中にも狼の話しの如きは取分け面白し。但し、子供のうたふべき唱歌など加へられなば、更に一さきわの事なるべし。

○青年雜誌

第一號、青年滋石會より發兌す、橋口傳氏が發行の主旨に據れば、此は政黨の機關にも宗教派の機關にもあらずして實に日本各地に散在せる有爲青年が當代の青年の所行を憂慮痛慨し將來の日本を遠慮深考するの余情發して遂に此誌さなるものゝよし。左ればにや、論文に未だ左程ど目覺しきものを見ずさ云へど、雜報には既に幾多の英氣を洩し來れり。先つ女學雜誌につきて云はば、演劇さ云へる一項には、女學雜誌が嘗て男女混合演劇の事を論じたるを大不滿足の事さし、更に大憤怒するよしにて叱り、かゝる胸襟狹隘のシバイを好まんより五大洲の大演劇を見よさ數へ。次に女學雜誌の提燈持さ題し、彼には左錄に婦人白標倶樂部、右

鋒に婦人矯風會と云ふ、實に得難きの忠實なる提燈持あり、之を以て女學雜誌に勢力あり、而して其の他より猜忌さるゝ所ろも亦玆にありと評す。堂々たる二個の大婦人會を稱して微々たる女學ざつしの提燈持と云ふに至つては大不禮の言辭と云ふべし、吾黨は光たらんことを欲すれども燈提を持んことを願はざるもの也。但しかゝる直言は、兎に角青年雜誌にあらずんば言ふことを得ず、故に吾人は甚はだ之を聞くことを好む。追々間違ひなき正論の諤々たらんことを待つもの也。

さゝのや五百首

雲峯子

寶石を得んとせば深山の土石に求めざるべからず、眞珠を取らんとせば海底の藻屑に捜らざるべからず、古來の歌人幾百千人ぞ、古來の詠歌幾億万首ぞ、而して眞に歌人といふべきもの遂に幾人かある、誠に歌の見るべきもの幾種かある、三十一文字を書き列ぬるもの必らずしも歌人ならず、三十一文悉く和歌ならず、吾人は思ふ古來無數の三十一文中記し來れば眞に和歌といふべきもの寂々寥々眞に寶石を深山に求め、眞珠を海底に拾ふの比にあらじと。吾人は今さゝのやと號する伴林光平翁の歌集なりといふを見て益かく感ず、編者之に序して曰く「翁は安政の末深く皇威の衰頽を歎き、且つ幕府の專橫を憎み、南山の美擧に與せしも不幸にして囚となり、身遂に獄中に死せり(中畧)螢火雷光の苦を積み萬葉の風骨に擬し(中畧)古今集に倣ひ(中畧)新古今を摸し云々」と、果して斯く古代の和歌を學び、遂によく其長所を摸し得たりしや否や、吾人竊かに之を疑ふ、されど其南山の美擧云々により、其人物風采の如何を想望するを得、其詠じ殘せる三十一文字に多少の氣概存するなるべし、吾人は容易に味ひ難きを恨みとなす。吾人の望む所は歌數の多きにはあらで數は少なくとも金玉の詠を見んとするなり、編者が殊更に五百首とせんと欲せしが故に藻屑泥土の如きもの混入して爲めに眞珠寶玉其光りを蔽はるゝの感なき能はず、石土山をなすも遂に一塊の金玉に如かず、吾人は其撰擇の當を得ざりしを深く惜む、されど冊中亦見るべきの詠多し、例せば

早春の鶴

たづが音は遠くかすみて君が代の長野の松に春風ぞふく

海邊早春

瀬戸こゆる汐氣のみこそかすみけれまた下萠の蘆のやの里

閑屋秋深

陰くらき軒端の松のさがり苔一葉黄ばみて秋ふけにけり

の如き面白きものと云ふべし、猶精細に讀み反さば金玉の詠多からん、吾人は編者がかくさゝのや集を世に公にせるの勞を謝して結辭とせん。

文壇

青年諸君が忙がわしき學暇を以て一雜誌を編輯せられんとするは、なみ〳〵の希望にはあらず。第一號未だ左したる特殊の點あらずと云へども、快活なる青年の英氣は十分に見ゆ、願はくは老ゆることなくして、人とならんことを。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

○賢夫人陸軍少將の半身桂貞子の君を悼む

佐々城豊壽

桃李海棠は櫻花の艶麗なるものなり、梅薔薇蘭木犀は花の芳馨なるものなり枇杷葡萄蜜柑林檎は果實の美味なるものなり、山河を粧ひ村落を飾り宇内の眺めを富饒ならしむものは紅紫黄白の花なるべし閨中人を悦ばしめ餘韻嫋はしく徘徊去る能はざらしむもの無形一種の芳馨ある✓し人を益し世を利し閑學の快樂を滿備せしむるものは甜酸豊熟の果實なるべし艶麗の花にして芳馨の氣韻を備ふるもの極めて少なし况んや其美景の果實を備ふるものに至りては極めて少なしとなす桂夫人は天資容貌美麗にして風裁極めて沈着なり言語動作の如きは通常婦人より尙一層の沈靜にして穩和なるにも拘はらず藹然たる慈愛を含み又沈靜の中に凜然たる義氣に富む、智識豊かにして判決速かなり善事を行ふに剛毅にして恐る所なし居常謙遜にして身分なき者にも親切に或は訪問せられしなど通常上流社界の夫人の爲す能はざる行ひ頗る多かりき

余が夫人を相知る極めて日淺く未だ十回に足らざる面接にして能く夫人の履歷勿論百分の一をも描き出す能はざれども僅々一ヶ年半中に夫人は厚渥なる熱心を以て余が事業を補益せられたるは十年の恩遇よりも尙厚きを感じたり去年三月余等數名と共に同志社大學校設立の擧を賛して音樂會を開きし時の如きは夫人の盡力實に非常にして金勞共に躬つからせられたり又本年の春以來貧女授産方法の計を爲すや夫人は最も熱心なる贊助と資金とを兼て又奔走盡力の勞をも取られたり是ぞ夫人か義に富み愛に深く天資明敏にして善を行ふに剛毅に決斷立ところに定まる如き英才あるに非されば決行し難き事どもなり

夫人は慈愛に富み公共心に厚きのみならず四民平等の主義を抱かれ上流貴顯の間にある極めて風潮に動搖せられず專ら自主の氣象を存するは深く心に根底する一點の光明亮々として四方に反射する基督教の大義正道に到達する恩賜に元由せしなるべし、然して上流社界に一閃の電光を反射せしは桂夫人其人と言ふも不可なきが如し、世に賢夫人多しと雖も桂夫人の如き敏捷にして聰明善事に大膽なるは殆んど多らざるべし上流夫人中實に得難きの賢夫人なり寧ろ賢夫人と言はんより桂夫人は婦人中の人傑なりと稱するは其當を得たるものあるべし、今突然夫人の訃音に接し痛歎措く能はず胸中十分の一を記する能はず、夫人の永眠は獨り僅少の愁歎に非ざるなり感化德育の上流社會を薫陶する勢力の一時或は停止するの傾きなからん乎、假令上流社界の進化は停止せざるも夫人の死は一方進化の勢力を減ずるに至るは痛歎に堪へざる所なり然らば夫人の死は日本上流社界の開化十年の進歩を妨ぐものと言ふべきのみ、

夫れ彼の海棠櫻花桃李は夫人の美貌なり幽蘭薔薇木犀は夫人の氣韻なり枇杷葡萄蜜柑林檎は夫人の結果なり海棠櫻花桃李の艶容にして幽蘭薔薇木犀の芳香放ち且つ枇杷葡萄蜜柑の實果を結ふもの世間多くあらざるべし余今桂夫人に對して殆んど此眞相を備ひたる者と云ふ暴風その樹を倒すも其品位を滅ぼす能はず

○田邊次郎一君小傳

岡本賢輔

田邊次郎一君靜岡人也其祖石菴先生爲昌平黌教授々々子則蓮舟先生今之元老院議官太一公也而君爲公次子幼而岐嶷不假師授能宛轉弄筆作書畫形最喜畫回綠氣貌爽活居常不馴弗末帖々隨人早已承藉家學年甫十歲游於小石川同人社君不深研精且年最少翹然出衆試輙高等每夏社友泛舟江戸川君一日舟中呼嚴本某謂曰吾行將振興商業以利于國家會姨夫安藤太郎君爲駐劄香港領事官將赴其任君欲隨行屢乞之公々以其幼不允於是晨起手一編文遣公暌室拜跪而述其懊殊切公爲感動乃許焉時年十二君既得請到香港入中英書院勤業不怠同窓英米人服其敏兄事之年十四院試次英人爲第二得卒業證未幾而歸身既長大如十七八歲一朝忽默而不語食後數次徊徨濟端家人咸異焉有問之者笑而不答幾七日如之至是氣象一變而深穩若老成人事親曲得其歡心而愛人如已且持守尤嚴始志于國學々和歌於伊東祐園翁其所賦高韻有古人風翁奇賞之其書亦翩々逸秀然人未嘗見君學書也既而學國賓學於商法講習所年十六試名居第一得卒業證於是應三井物產會社聘參其社務年十八爲在倫敦三井物產會社支舖長乃赴英京而幹其任盡其任匪輕而君機警能勝任遇事則咄嗟立辨以故識君者益信其可用期以遠到會患肺炎當初疾甯減即力出辨事漸致勞傯於是乃爲歸計明治十九年四月七日起程航地中海遺興疾益劇四月十四日遂殁於船中年二十初君發東京也賦欲一首曰美遠多都留波志免奈留邊幾和加禮道毛奈登加久婆可利加奈志加留羅武君藹然走洋抒其夙抱而其歌如此蓋議云夫有其實而稱以美名非君子之用心乎新島襄師天下信士也嘗語君事於人嘆曰眞英物也君之造就可想矣。

◉兒守歌に和文の妙あり

まさた

歌ふものも解せず、聽きつゝ眠るものも知らざるものは、兒守歌の風致あることなり。人は兒守歌として卑下す、己ハかくの如き俗調の中に、幾多の閑雅優美の風を帶びて、其言ひまはしのよきものあるを喜ぶものなり。左にその聞き得しものを記して讀者の一粲を博すことゝなしぬ。

れんれころ一、竹馬與一、竹にもたれて、ねゝなされ〳〵。

ねゝあされませ、今日は二十五日、あすハ此子の誕生日、誕生日にハ赤飯たいて、一しやう此子のまめの様に〳〵。

ねんねれしようぶよ、ぜんまい、わらび、ゆでゝたべるはうごがよひ〳〵。

もりハ憂ひもの、子にせめられて、人にや樂みに思はるゝ〳〵。

もりよ、子守よ、なかすな守よ、なかすまいとのもりじやもの〳〵。

ないてなくれな、なかいでさへも……なけば名がたつ、守のながな〳〵。

ねんねんや〳〵、ねんねこちりは何所へいた、あの山こへて里へいた、里のみやげにや何もらふ、でん〳〵大鼓や笙の笛、をきあがりこぼしに風車。

文論

みれ子

●貧民救助　神田駿河台西紅梅町十三番地河合某氏よりの通知によれば同氏等志を同ふする者相集つて貧民救助の策を廻らすよし「窮民にして病氣の爲め生計の途を失ひ命旦夕に迫る者は救助する故報知せよ」とあり、其志實に殊勝の事と云ふべし、貧民にして活計の道なきものは救を求めらるゝ樣此に御報道申上ます

●沼津あさき氏　煙草の害になる事は仰せの通りです、扨て之を知らずして煙草を好む人は實に憐むべきの至りです、親戚や朋友に斯る人あるならば成るべく之を絕たせたいのは人情の然らしむる所です、然し習慣の久しき害と知つても煙草や酒を好む人は止める事ができません、雨子は化學上煙草を分析して其害ある事を示し之を止めさせようとなさる御志は甚だ美はしく感服するの外ありません而酒や煙草の害になるといふ事は之を好む人自らもよく知つて居るのでしよふ、故に之を斷たしむる最上の方法は感情に訴ふのです、例之ば宗教上よりする類です、迚も理論からは六かしかろうと思ひます、分析の事尙必要と思し召さば亦重ねて御答へ申上ます。

●牛乳檢査法　牛乳は甚だ必要の滋養物ですが間々不良のものありて功能薄い事がありますそれ故よく檢定法を發見して其良否を知るのは大切の事です、今沼津あるあさぎ氏より何か簡便の檢査法はあきやとの御問ひがあります、世の此事に志を留めらるゝ人は御發明の方法御存じあらば本社に御通知を願ひます本誌に掲げて世の同好の人に知らせたくと思ひます。

●育兒學　熱海の一少女氏、育兒の事を敎へたる書物は何がよきやとの御問ひ、色々之に關した書物もありましよふが充分問ひ合する時もなく今之と云つて存じません、本社發兌の通信女學中に育兒法と題して平易簡短に敎へてあります、三島通良先生の「母のつとめ」と題する書物も宜しひでしよふ其價は四十錢です、本社より御取次を致しますとの事です。

時事

○女學の衰退

經濟雜誌記者は、女學近頃メッキリ衰退したりとなし、其元因の一つとして或人の說を揭げ、女子教育の任に當るもの多くは人情の何たる解せざる迂僻の人々なるを以て、女子を女子らしく教育するとを知らず、此に於て女學の衰退を來したり、もし隔地櫻痴先生に就き少しく粹理學にても研究したらんには、此の憂ひあらざりけんをと云へり。表面上には成程女學衰退したり、然れども女學もし眞に衰退せりと爲さば文明一步を退けりと爲さずんばあらず、何んとなれば經濟記者が嘗て言へりし如く、女性を待する優酷の何如んは文明の高低何如を知るの標準なれば也。然し安心すべきは、女學決して衰退せず、たゞ流行女學熱大に衰退したるの事にあり、鹿鳴舘風隆んなる頃は、輕薄なる父兄其娘に英學と舞踏とを習はせんとに執心したり、然るに近頃る其流行一變して國粹風田舍向に流入せしかば、父兄亦もや其娘に縫針と薙刀とを教へんとに發心したり、一逕一轉宛から浮草の西に東に流るゝが如し、何んぞ之を見て衰退と云ふべけん、寧ろ流行の變遷と云ふべき也。而して濫りに英學を多く教へ、もしくは切りに西洋風を習はしむるが如き女學は、本來有害の女學なり、かゝる女學の衰退するは即はち眞誠女學の進步する證標なり、故に云く、眞との女學決して衰退するとなし、日々に進むと。吾人は或る種類の女學校の實景に鑑みて確かに此事を驗知す。

○矯風家の言行

矯風改革の事、消樂にあらず、商賣に非ず、兒供の戲むれにあらず、苟くも之に從わんとするものは、心謹愼にして言行堂々万事高潔ならずんばある可らず。讀賣記者左の一評の如きは、果して評者の失か、そもく評せらるゝもの丶失か、人深く慮ばかる所あるべき也。

○春湖女史保安條例を布かんとす　近時女風の腐敗せる事に付ては世の有志家が頻りに心痛する所なるが女風腐敗の原因即ち女子社會の虎列剌病とも云べきは公然大都に營業する夫の藝娼妓なれば發藝娼妓論の實よし行はれずとするも有志者之に向ひて保安條例を發行し藝娼妓又は密賣淫をして宜しく大都を去らしむべしとは今回設立されたる女子德義會中或る熱心家の精神なるが幕府の頃大江戶の女風頗る腐敗したれば時の役人大に之を憂ひて一種の保安條例とでも云ふべきものを施行しあらゆる藝妓を郡外に放逐したりしかば藝妓等之を悲しみて能役者なる金春八郎氏の屋敷へ逃込み表面全家の下婢となりて密かに遊客の招きに應じ外出の時は金春家の乘物に乘り緞棹の三味線を工風して之れを携へたりとかや（今の金春は即ち八郎氏の屋敷趾なり）斯れば女子德義會中の熱心家に先ちて旣に保安條例を發して藝妓を退去せしめ而して結果全を得ざりしものは舊幕の役人なりとす德義會有志家の今より執行せんと欲する保安條例其結果果して如何あるべきかは知らざれども恐らくは其功を速にする能はざるべき也而して德義會中斷乎として熱心舊幕の役人を學ぶものは誰なるぞ曰く全會第一の義人兼雄辨家なる春湖女史其人なりと。

○洋妾と支那妾との相場

相場、あゝ相場と云はるゝに至る、載せて報知新聞去廿五日の紙上にあり。

○探偵美人

むかしは探偵に女を用ひたり、此は戰國亂離の常、男子は自由八方に出入するとあたはざりしがゆへ也。然るに今の時世亦た此の蹤に傚はんとするは何の痴愚ぞ、こは全く女性の質を知らざるもの也。吾人は婦人の爲に慮ばかりて決してく如此卑劣事をは爲すと勿れと勸む、而して之を用んとするもの丶爲には、其用の必

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らずや空に歸すべきとを告げ、其不心得を諫止せざるを得ず。

○スタイン翁卒す

翁沒す。今后日本の政治家は、日本の開化史を研究し、日本の風俗を精察し、深く自ら創考して遠く長計を決すべし、是れ亦翁が遺訓なり。而して翁が爲めに義捐金を募るの策甚はだよろし、只た之が用法は、大學政治科の優等生にスカラルシップとして與ふるか、もしくは有益なる書籍室を設くるかに若くとなし。

○支那人の妻

「日本」の記事に云く、

判官問ふ何故に夫の家を出でしや、婦答姑母殘忍常に鐵鎖を以て首を拖し殆んど死せんとすること屢々なるに因る、判官怒て婦の口邊を打つこと二十又二十且背に百杖を加ふ皮破れ肉裂れ流血淋漓たり而して婦尚は夫の家に歸るを肯んぜず聲を吞で啼泣するのみ、判官原告に向ひ此婦執拗余が言を用ひず汝亦伴ひ歸ることを要めざれ須らく賣て婢となすべし、婦遂に毒を服して自殺す是れ清國上海裁判所に於ける妻女取戻の訴訟なりと、怖るべき哉。

妻は、家の爲の妻乎、姑の爲の妻か、將た良人の爲の妻か、而して良人の爲には、其肉の妻か、靈の妻か、仕ふるが爲めの妻か、助くるが爲の妻か、儒教及び耆主義の論者は深く鑑みずんばある可らず。

○功臣優待

陛下　願はくは板垣伯を貴族院に擧ばせ玉はるべし。而して伯は決して多年の素志を曲ぐるとある可らず、とは吾人が微衷を吐露して畏きに豈さか述言したる所なりき、今や實に如此くなれり。　陛下が功臣を優待あらせ玉ふと、伯が日本の立憲政に付きて顧慮するの心切なると、感涙せきあへず。吾人は又近來、伯に付きて、美談を聞くとの多きを喜ぶ。

○新樂器

在獨逸國留學生、理學士田中正平氏は、一種の樂器を新工夫して、獨逸國學藝の社會を驚歎せしめたるが、　國の天皇の御耳に入りて、或る日御前に出で、新樂器にてとある曲譜を彈じ叡慮に供へ奉りたるほどなり。此度日本皇帝陛下　之を殊勝の事と思召し、金一千圓を下賜して恩送あらせ玉ひぬ。田中氏の譽れは言ふに及ばず、日本國の光榮、ことに女學社會の幸わひ一と方ならぬ事と云ふべき哉。

因に云く、右新樂器、即はちエンハルモニウム（澄清風琴）の事は、學藝雜誌第百八號に於て村岡範爲馳氏の辨明あり、就て一覽あれ。

○男女混淆

演劇の男女混淆は寧ろ可なり、能樂に至つては殆んど其必要も利益もなきやうに思はるゝ也、大の男、女性の面を不器用に冠り、松の木の如き腕を半ば出してスソを取るなど、反つて能樂の粹ある處ろ也、吾人は寧ろ能樂に男女混淆せざらんとを望む。觀世氏以て如何となす。

○外人の祈禱

横濱に於ける基督教徒發起の對等條約祈禱會にて、日本人も外國人も上帝の前には一躰の同胞となり、共に公平なる祈禱を捧げたるうち、尤も我人を感動せしめたるは、米國人少女エメ孃の祈りなりしが、改進新聞に其語ばの一節を記して云はく、

神よ願はくは汝の恩惠と威德とを藉り彼我の國人をして天地の公道に基づき毫末の私心を其間に存せしむるとなく首尾能く對等の條約を締結し得せしむる樣冥護あらせ玉へ。

又、米國人ゼームス、バラ氏の祈りに、

神よ願はくは吾ラーをして、謙遜ならしめ玉へ、ドーゾ、外國人をして、むかし、困苦した事、思ひ出さしめ玉へ。

○大同新聞

は集會及び政社法の修正論中、女子に關する項に付きて極めて公平なる議論を爲したり云く、

然れども教育の進歩する諸邦國中には往々婦人に政權を付與すべしとの議論を主張する者あり漸次に社會に向つて其の勢力を得るが如し吾輩は今日の我國に於ては此の如き急激論の太だ不必要なるを知る然れども一國前途の利害上より之を思考するに成るべく婦人を政事上より擯斥すべきか將た成るべく政事社會の事情に通達せしむべきか吾輩は後者の意見を贊成せんとする者なり抑々婦人をして政事上の集會に臨むを得ざらしめんとする論者は普澳二國の條例に此明文ありと云へり然れども是れ大に事實を誤れり、

普國集會條例第八條　政事に關する組合は左の制限を受けしむべし、

一婦人生徒工藝見習生を社員と爲す可からず

澳國組合條例第三十條　外國人婦人及び未丁年者を政治上の組合に加入せしむるとを許さず、

此れに因つて之を觀れば此の二國の條例は婦人の政社に加入するとを得ざらしむる者にして其の政事上の談論を聞くとを禁止する者に非ざるなり何ぞ之を以て我が集會法の此條を辨護するを得んや故に吾輩の知る所に因れば法律を以て教員學生生徒婦人未丁年者の政談集會に合同するとは英米二國は云ふ迄も無く佛なり普なり澳なり曾て其例あるを見ず此の如き法律を設くる者は一の日本帝國あるのみ是れ吾輩が此條を修正する必要ありと爲す所以なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

宮廷錄事

◎皇太后陛下　京都行啓は來る十月四五日頃當地を發輿にて名古屋に御一泊遊ばされ三週間計は京都に御駐輿遊さるゝ御豫定なるよし。

◎皇后陛下　には此程新樹典侍を態々御使に立させられ目下大磯にて加養中なる山縣伯爵夫人の病狀を御尋ね遊されし由。

◎全陛下の恩賜　淑德慈仁なる皇后陛下は先頃土耳其軍艦沈沒の報を聞き食さるゝやいたく其不幸を悼ませ玉ひ負傷せる生存者をば疾く赤十字社に入院せしめて治療を施させよとの御沙汰を下し玉ひしとは其當時承り及びたる處なりしが今度また右の六十九名へフランチルにて造りたる病牀衣服を各一領づゝ下し賜はりし由にて遭難者は何れも感涙に咽びたりと今にはじめぬ陛下の御仁慈は之れを貸へ奉らんもなか〳〵畏きわざにこそ。

◎皇女の御歸京　兼て日光地方に御避暑遊され居候皇女常宮周宮の兩殿下は去る三十日に御歸京遊されし筈なり。

片々

●女子學院附屬幼稚園　上二番町の同園は渡瀨寅次郎氏夫人專ぱら擔任せらるゝが、此期よりはエダ孃も助任せらるゝと云ふ。

●婦人矯風會　は其會の運動費を募らんが爲め來る十一日紅葉館能樂堂に於て寶生九郎氏の能舞を催ふし慈善會を開くと云ふ。

●京都高等女學校　京都高等小學校にては今度新に習字科を設け川瀨益氏に教授を囑托せられ又和文科教員小川昌子辭職につき尋常師範學校助教諭猪熊夏樹氏が其後任を命ぜられたるよし。

●外人と結婚するもの丶注意　外交の久しきに連れ追々外人と結婚するものも殖ゆることなるが夫に付爰に一の注意すべき事といふは或る醫師の說に近頃歐洲に於る癩病の勢力なか〳〵に强く隱々の間に諸方に傳播し居りて美しき紅顏男女の服裝の下に宿るもの少なからず中にも東洋に流離するもの最も多しといへりとか

●教諭任命　高等師範學校教諭從六位南摩綱紀氏は兼女子高等師範學校教諭（奏任官三等）に高等師範學校教諭大和田建樹氏は兼女子高等師範學校教諭（奏任官六等）に任ぜられたり。

●信徒なるが故に免職　鳥取幼稚園にては先頃一人の保姆を基督教信者なるの故を以て辭職せしめたり全園は私立なれども官員及び教師の重なるもの丶盡力多くして鳥取婦人會及び有終會の設立する所なり而して創業の際は右保姆を乞ふて保育を依賴したるものなりと。

●日本赤十字社　土耳其軍艦の救護として日本赤十字社より派遣せられたる委員高橋種紀氏等より其本社に報告せられたる所によれば重傷十三名內打撲に由り肋膜肺炎を發し重症に陷るもの一名而して縫合を施したるものは大腿打創二名上頭打創一名骨折は下腿に一名前膊に一名あり關節創三名臀部挫創一名其他腹壁刺創大腿の筋肉創等なり現今輕重共切斷術を要す可きものなし輕症に至ては大抵擦過創なり而して遭難後獨逸軍艦の軍醫にして治療せし二三名の外は創面凡て「セプチセー」にして惡膿狀を呈し甚だしきは惡症に陷りたるものあり或ひは間々痂を結ぶも痂下に膿を釀し臭氣甚しきを以て何れも充分治療の手當をなしたりとの事なり。

●柳川婦人會　福岡縣筑後國柳川にては有志の婦人相計り昨年五月來婦人會なるものを設置し每月一回演說會を開きて地方名望の士を聘して女性に必要なる演說講話をなさしめ會員外の婦女にも傍聽を許し又別に每月一回例會を開きて會員相會し各自感ずる所を述べ傍文章等の講讀をなして互に智識を交換することを力むるといふ目下會員六十餘名なれども追々に盛大になるべき望みあるよし。

●菓子商京都に大會を開かんとす　本年國會開設の時を俟て菓子國稅の全廢を請願せんと過日來全國菓子商の有志者が奔走中なりと聞きしがいよ〳〵關東は名古屋に集り關西は京都に會することに決し去廿二日京地の組合事務所に於て此事の協議に及びたる由。

●阿波縮　德島縣の產物なる阿波縮は近年大に需用者增加し外國人なども之を夏服に仕立て或は和服に仕立て寢衣に着ることの事なるが本年の輸出高は總計四千三百六十九捆にして每捆の反數一定せざれども假に之を百十五反入りとすれば四十八万五百九十反此價二十六万四千三百廿四圓五十錢なりと。

●音樂博士の預言　歐洲音樂博士「テルシャック」氏は當時東京音樂校生徒幸田幸子といふ人の演奏を聞かれ將來望ある女生と正に豫言されしと此人の姉幸田延孃といふも嘗て東京高等師範附屬校に在りしに先年米國の音樂博士「ルーサル、ホワイング、メーソン」氏が撰拔して音樂取調所に入れられたるに其技衆に拔んでたるを以て既に米國に留學を命ぜられたりと斯く姉妹うち揃ふて共に博士の賞贊を得しは實に珍らしき事といふべし。（音樂雜誌）

●女學校の割烹科　高知縣尋常中學校女子部にては此程家事經濟實習科の一部へ割烹科を加へられたりと吾濟は一般の女學校にも此種の科を加へられむことを望む。

●谷間の姬百合咲揃へり　末松謙澄氏の飜譯に係る谷間の姬百合は今回其第四卷を發行し全く結尾を告げたり。

●正誤　二百三十一號第廿四頁上段第三項辭書勸告云々は取消す。又た第二百三十號伊澤けい子傍中、波多野氏の歌は如左、

咲きてだに凋めば惜しき花なるを蕾ながらに枯てける哉

廢娼記事

●三重縣下

社友の來信に云く、同縣下は元と古市、一身田、津(藤枝)、四日市、桑名の五ヶ所の妓樓ある耳なりしに、賦金を增し且つ賦金を利用せんとするもの〻企だてより、頓かに各郡各所に妓樓を置くとを公許したりしかば、今は到る處ろにあり、貸坐敷總計三百八十二軒、娼妓一千七百五十六人あり、之が爲め風儀いよ〳〵あしく、娼妓となるは婦女の出世奉公の如く心得、下婢となるは娼妓となるとの出來ぬものとして寧ろ下婢奉公を耻づるの風習あり、歎はしきとにて必竟妓樓公許公存の弊なり、時世進むにつれて惡風自づに止むなど云ふは事實を知らぬ人の臆說に候。

●茨城縣下

の那珂郡木崎青年會は、去廿三日廢娼論の大討論會を催ほしたる由。

●存娼建白

氏家直國、加川權虎、田口萬次郎、合田愿の四氏は過日府廳に出頭し蜂須賀知事に面會し存娼の建白書を呈せり。

●高田

越後高田なる高田青年會員は滿天下の同志と合縱して廢娼建議を帝國議會になし兼て同縣々會へも建言せんと決議せり。

●橫濱廢娼演說會

(橫濱通信員)

同會は去る廿九日午後七時より住吉町會堂にて開かれ百五十名許りの聽衆あり喝采拍手の音は反て辯士の口舌を妨ぐる程に喧し中に度々大聲疾呼して「喝采々々」と叫ひし一書生ありしも一笑なりし東京廢娼會よりは「盛會を祝す」云々の電文ありたり。

●神奈川縣　其二(上)

佐々木　笑受郎

是より先き菊池氏より直に進んで

陶綯郡

大磯に行く時旣に夜二更連日の疲勞みな旅宿の爐湯に洗ふて眠る茲に特筆して上帝の加護の甚だ深かゝりしを感謝せざるべからざる事あり大磯町の大火之なり數十の旅客と共に屋上に之れを望めば笑受郎が最初宿せんと思ふたれど或る默示に因て其れに投ぜざりし旅館二軒は恰かも吹く風に飛ぶ火粉に埋められ幾多の旅人は狼狽一方ならず明日其前に過ざれば鍋釜等は投げ出されて朝飯未だ炊かれざる如く實に氣の毒に思はれたり而して笑受郎は何等の幸福ぞ正義の神余等の運動を祐くる篤きこゝに至るかと思へば胸は感謝の念を以て滿々たり此出來事の爲めに大磯町に住する議員町長なども兼れらるゝ中川亘知氏は未明より火事場に奔走しあれば會ふに由なくほと〳〵困却に感し居たりしに小閑ありとて延見されたり氏は笑受郎か申込に對して答ふらく余は此地に生れ此地に成長し而して又此地より撰ばれて議員たり町長たり若し夫れ單に議員と云ふ耳ならば以て若くは一個人の資格を以てせば固より贊成のことなれば調印もすべきなれど如何にせん町長なる名目は余の印を奪ふて茲に捺すべきを拒めりアゝ幸に止むを得ぬ情實あることを諒察せよ」と反覆互に說論する一時半餘遂に氏は笑受郞か申込を辭せり此より舊自由黨内に在りて當縣議場に於て神奈川縣政治海に於て有名なる永々議長席を占めたる水嶋保太郎氏を訪問す不在なり遺憾際限なし餘儀なく踵を轉ぜざるべからざるに至れり然れども後或地に於て面會するとを得たれば例の申込を爲せしに異論なしとて直に贊成の押印ありたり陶綯郡の議員凡て二名而して其一名の贊成を得たり

通信

●三重縣

通信員　中村　健報

●女學　校私立三重女學校は明治二十年一月の創立にて大字丸の内にあり抑本校は當縣華族當盛井敬子外五名の發起に依り當縣士族河原田俊藏氏兵庫縣士族林正幹氏等數名の經營する所にして其敎科は稍高等なる普通科及び毛筆畫手藝科等にて生徒を本科豫科別科の三種に區別し敎授せらる生徒は現今七十名計なりと云ふ年一年進步の狀を觀るもの〻檬考へらる。

●幼稚園　三重私立幼稚園は有志者數十名の設立に係り私立女學校内にあり經費は保育料の外一切有志の義捐になり園内諸般の設備稍完備して追々隆盛を見るに至り幼兒現今の數は五十有餘名なりと云ふ。

●婦人會　三重婦人會は津市婦人社會の組織になり本月六日午後六時より私立三重女學校内に開會し出席講師は醫師今井通氏にして衛生上の必要の事項を講演せりと云ふ。

●四日市通信

●幼稚園　前の通信の如く當港は近來漸々學事にも注目するのすがた故初稚園などの設けはなかりしが頃日高等小學校長稻坂茂郎氏頻りに盡力して尋常校の附屬として設くるとになり不日開園の運びになり居れり。

●婦人會　本月十四日午后一時より四日市校に於て同會を開しが出席者は凡そ廿五六名にして醫師鵜飼德太郎氏の虎列剌豫防に付細密なる講義ありたり。

●週報

○官令　廿六日鑛業條例發布せらる
○宮廷二十五日　宮中に於て七十八名の元老院議官に陪食仰付らる
○政治　九月三十日貴族院規則案幷に衆議院規則案を各議員へ配布せらる
○廿日　貴族院議員五十五名勅選任の沙汰あり
○敎育　廿八日小學令を樞密院の會議に付せらる
○彙報　廿六日對會條約會員外務大臣を訊問す○墺國の碩儒スタイン翁逝く○土耳國軍艦「ヘルトグロール」遭難者は軍艦比叡金剛にて護送する事に裁可せらる○内國勸業博覧會事務局は九月三十日を以て上野を引拂ひ舊工務局跡へ移轉せり

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす每科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

廣告

土耳古軍艦沈没義捐金募集廣告

今回紀州沖ニ於テ土耳古軍艦エクトルロール號沈没ノ慘狀ハ實ニ我邦人ノ目視スルニ堪ヘザル所ナリ因テ弘ク仁人義士ノ義捐金ヲ募集シテ罹災者ヘ見舞ノ爲メ贈付セントス右御同感ノ諸君ハ弊房又ハ左ノ新聞社ヘ宛御送金有之度候也

東京下谷區北稲荷町四十番地

主唱者 三三文房主 山田寅次郎

協贊（いろは順）

日本橋區藥研堀町三十三番地 報知社
京橋區尾張町一番地 日報社
京橋區山下町 東京新報社
京橋區瀧山町四番地 東京公論社
仝 東京朝日新聞社
京橋區三十間堀一丁目 繪入自由新聞社
京橋區尾張町二丁目一番地 やまと新聞社
京橋區尾張町新地七番地 毎日新聞社

○義捐金ハ一口金十錢以上トス○義捐金ハ各領受シタル新聞紙上ニ金額及ビ義捐者ノ人名ヲ記載シ之ヲ金員受領ノ證トス○募集ノ義捐金ヲ罹災者ヘ贈付スル手續ハ係官衙ト相談ノ上公告スベシ義捐金募集期限ハ七月十日トス

謹告

黒川眞頼先生校閲 鈴木弘恭大人著
女學校用讀本 **源氏物語拔萃** 全五冊 定價壹圓廿五錢

小杉温邨先生序 鈴木弘恭大人標註
參考標註 **土佐日記讀本** 全壹冊 定價貳拾八錢

久米幹文先生序 鈴木弘恭大人標註
參考標註 **竹取物語讀本** 全壹冊 定價三拾錢

中學師範學校女學校敎科用書

獨立國の文章にして獨立せざるは猶紫鶬鶊にして福島島の聲を學び鷹にして鳶の聲を發するが如し豈遺憾ならずや維新以來西學東漸百科の學藝駸々として大に文明の域に進み事物共に舊觀を改めまた昔日の陋にあらずと雖も其弊や我國粹を併せて排斥迷信の極遂に國語を廢せんとするに至れり然りと雖も世豈に識者なからんや獨立國にして獨立の國語國文なかるへからずと唱道するもの尠からず近來大に世夢を醒破し我國文再興の時機に到來せり是れ帝國の爲めに賀する所にして實に紫鶬鶊にして其特有の美聲を呼し鷹にして其固有の健翮を振ふに異ならずや今擧ぐるところ三書の如きは國文の中粹の又粹なるものあり而して世上既に其書に乏しからずと雖も或は文字誤脱夥しくして完全なるもの尠きのみならず且源氏の如き徃々淫褻の事項ありて妙齡子女に讀ましむるに適せず是を以て鈴木大人其五十四帖中に就き其避くべきを避け採るべきを採り以て全五卷となせり而して鼇頭に註釋を掲け異本の校正を加ふる等至れり盡せりと云ふべし故に官立は高等中學校及び高等女學校私立は明治女學校を始めとし敎科書の採用せらるゝの粲を得たり又土佐竹取二書の如きも亦大人の校正標註に係るものあれば毫も疎漏杜撰等のあることなく各種學校國文科に用ひらるゝもの勘しとなさす江湖敎育家諸君愛顧を賜はらば唯に弊軒の幸福のみにあらさるなり

謹告

行所 東京日本橋區濱町壹丁目十七番地 **微笑軒**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

普通衛生雜誌

八月十六日發行の第十九號には醫學博士緒方正規君の『コレラ病の用心』及醫學士笠原光興君の『學童の休暇轉地に就て』と題せる論說を始とし衛生上有益の紀事二十餘件を揭載せり其他附錄として醫學士坪井次郎君の『普通衛生學』講義を逐號分載せり

定價一冊六錢郵稅五厘●一ヶ年前金七十四錢

東京日本橋區蠣殼町二丁目十四番地

普通衛生雜誌社

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述	つれ〳〵草講義	一冊	價金十錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	一冊	同十八錢
關輪正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中嶋俊子著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同廿五錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治述	妓樓全廢	一冊	同五錢
嶋田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同五錢
農學士寺尾熊三著	植物學	一冊	同五錢
林學生星野演著	昆虫、植物、金石採集法	一冊	同十五錢
明治女學校教師八木兼長著	和書手本	四冊	同四十五錢
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同八十錢

下六番町六番地　女學雜誌社

廢娼演說會

辨士　根本正

時日　來ル十月四日(土曜日)午后七時開會

場所　下谷區仲徒士町貳丁目卅八番地下谷メソヂスト教會堂

發起　日本メソヂスト下谷青年會

女學生第五號目次

社說　ホームの眞相　天知子

批評論(前號のつゞき)　雲峯生

文欄○變遷(安田岩子)○美人採蓮圖(松本錦子)和歌數首○魚を放つ(中谷早稻子)○和歌二首○墜果(松田千子)○豐年を祈る詞(佐藤德子)○遊相日記(松本錦子)○偶感(かへで)○友のまじはり(平關せつ子)○歸宿の感(堀塲いと子)○學年の終りの感を述ぶ(辻甫)○去りたし塵世を(深山すゞし)○旅立つ朝(清川女史)○扇のはなし(英文)(栗本すて子)○英文批評　青葉つゆ子

講武欄　薙刀組手(つゞき)　風流齋

公評○霞仙女史の文を讀みて(蘆の舍)○すぐれもの(四下生)○うまいとまづい(暗野女乙)○第四號文欄の短評(竹外小史)

寄書○和歌十首○小說返魂香(其三)(柵山人)

女生交詢　牛込不來方女子に辨ぜん(M、S、N生)

報告廣告

以上

發行所　下六番町六番地　女學雜誌社

定價			
一冊。	六錢	郵稅。五厘	(但府內無郵稅)
十冊。	五十八錢	郵稅。五錢	(同前)
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓五十六錢
一年分	二圓六十錢	府外は	二圓八十六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

普通衛生雜誌

定價一冊六錢●一ヶ年前金七十四錢
郵稅五厘
東京日本橋區蠣殼町二丁目十四番地

八月十六日發行の第十九號には醫學博士緒方正規君の『學童の休暇轉地に就て』及醫學士笠原光興君の『コレラ病の用心』と題せる論說を始とし衛生上有益の紀事二十餘件を掲載せり其他附錄として醫學士坪井次郎君の『普通衛生學』講義を逐號分載せり

普通衛生雜誌社

女學雜誌社出版書目

書名	著者	冊數	價
つれ〲草講義	鈴木弘恭大人述	一冊	價金十錢
文法口授	鈴木弘恭大人述	一冊	同十六錢
百人一首講義	鈴木弘恭大人述	一冊	同三十五錢
產婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	一冊	同十八錢
ひめ鑑	關輪正路君纂	一冊	同四十五錢
善惡之岐	中嶋俊子著	一冊	同卌五錢
婚姻論	橫山雅男君著	一冊	同廿五錢
廢娼演說	島田三郞、植木枝盛兩君演說	一冊	同五錢
妓樓全廢	巖本善治述	一冊	同五錢
公娼可滅	嶋田三郞、巖本善治同著	一冊	同五錢
植物學	農學士寺尾熊三著	一冊	同五錢
昆虫、植物、金石採集法	林學生星野愼著	一冊	同十五錢
和書手本	明治女學校敎師八木雜辰著	四冊	同四十五錢
演說著作材料	女學雜誌社編輯	八冊	同八十錢

下六番町六番地　女學雜誌社

廢娼演說會

辨士　根本正

時日　來ル十月四日(土曜日)午后七時開會
塲所　下谷區仲徒士町貳丁目卅八番地下谷メソヂスト敎會堂
發起　日本メソヂスト下谷青年會

女學生第五號目次

社說　ホームの眞相　天知子
批評論(前號のつゞき)　雲峯生
文欄○變遷(安田岩子)○美人採蓮圖(松本錦子)和歌數首○魚を放つ(中谷早稻子)○和歌二首○墜果(松田千子)○豐年を祈る詞(佐藤德子)○遊相日記(松本錦子)○偶感(かへで)○友のまじはり(平關せつ子)○歸宿の感(堀塲いと子)○學年の終りの感を述ぶ(辻甫)○去りたし塵世を(深山すゞし)○旅立つ朝(淸川女史)○扇のはなし(英文)(栗本すて子)○英文批評(青葉つゆ子)
講武欄　薙刀組手(つゞき)　風流齋
公評○霞仙女史の文を讀みて(蘆の舍)○すぐれもの(四下生)○うまいとまづい(暗野女乙)○第四號文欄の短評(竹外小史)
寄書○和歌十首○小說返魂香(其三)(柵山人)
女生交詢　牛込不來方女子に辨ぜん(M、S、N生)
報告
廣告
以上

發行所　下六番町六番地　女學雜誌社

定價		
一冊。	六錢	郵稅。五厘(但府內無郵稅)
十冊。	五十八錢	郵稅。五錢(同前)
半年分	一圓四十三錢	府外は一圓五十六錢
一年分	二圓六十錢	府外は二圓八十六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

WASDN
HQ
1104
.J94+
Oct. 1890
no. 234

女學雜誌

明治二十三年十月十一日發行
第二百三十四號
一冊六錢。毎土曜日發兌

板垣伯を訪ふ記
泣て姉妹に訴ふ（清水豊子）
婦人國會傍聽論
親子論
岡山孤兒院の記
無學女の貞德乎（豊田芙雄）
山田美妙齋祝歌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY